

—(Enite) 然らば一層大なる義務を承認しながら一層小なる義務の關係を脱せんと欲し、別語之を言へば、神は唯一の萬物創造者たりと辨解しながら、神が四海の父たる結果を避んと望むは甚だ奇異なるか如し。故に善良なる造物主が無限の罪過に處する爲め自由に人を造り又自由二元論を採用すると云ふは深奥なる道德上の矛盾論たり、加之吾人は彼自身の自由なる意志を有する善良の神が限なく彼を恨むべき萬物を生存せしめ、或は彼が知る如く永く彼を恨み又永く罪を犯すべき萬物を實に創造したりと想像するを得んや、斯の如く畏敬すべく亦温和なる創造の光に於て口碑的信條は逡巡萎縮し去れり、<sup>セント</sup>聖ジエローム曰く、靈魂の神より來りたるを見れば、神の呼吸と精靈に依て扶助せらるゝ靈魂が永遠に死亡すべしと云ふは不正の説なりと(In Is. I vii. 6) ニウマン曰く、教會の主張する所に據れば、一の靈魂(余は斯く言はざるべし)

亡失して一の輕罪を犯すよりは寧ろ地球に取りては滅亡するを可とし、其上に在る數百萬の蒼生に取りては現世の苦痛に應じて極端の憂苦に於て餓死するを優れりとす。—Angl. difficult p. 190. 然れども若し然りせば神は數百萬の人民を自由に創造したれども其運命は神の確實なる知識に取りては望なき加重の罪、永遠無窮に枯朽腐敗を蒙る害惡に於て無限に存在をべしと云ふ事は實に解し難きにあらずや。

余は此より降生の事を思考せん、降生は基督教の大事事件なり、贖罪、聖晩餐、復活は皆之より起りて之に屬し、恰も降生の結果及其延長たるもの如し、扱て茲に此不可思議に就き數多の狀態あり、そは余の今論する所、非らず、余は耶蘇基督が第二のアダムとして降生せりとの一點を全く明に認知すれば足れりとす。故に降生は斯る稱呼を辨解する爲め人類の同一、絶對、有機の觀念を包含すべし、吾人の運命を一全躰と考定し、皆盛衰を共にせざる可らずと云ふに非ずんば、吾人の如何なる目



的を以て人類歴史の起源に溯るべけんや(ウルバーフォルス氏降生論)

\*此等の説は人類の一部が第二のアダムより永遠に分離せられたりと教ふる人の筆に成り著しき説なり、是れ吾人の口碑的神學を貫通する眞の虚偽に關する所説を説明するものなり。

人類の更生は第二のアダムに於る新創造に依りて彼の舊創造に反對せり——(同上)然れどもこは論理上人類の盛衰を共にする」と云ふ救済を包含せり、俗語を假りて之を言へば、救はんとせば残らず救へ、然らざれば残らず救ふなど云ふ事なりし(百三十八及百四十一頁を參看すべし)若し學術的の語を以て之を換言せば、アダムハ則ち基督(ADAM II)にして茲に基督は凡ての人間を代表せり、故に基督は最後のアダムとして心靈上の方程式に於て全人類を統括せり、實に口碑的信條は聖書の降生を構成せずして自個の降生を構成せり、其降生の子は神の子なるべしと雖も人間の子に非ず、第二のアダムに非ず、而して口碑的信條の基督は聖書の基督に非ざるが如く、其人間も亦眞の人間に非ず、蓋し人間は分離すべき無機の原子の聚合なりと教ふればなり、然れども經典の斷定する所の之に反せり、曰く人は各自の罪苦を負擔するは全く眞實なり、然れども更に高尚なる一眞理あり、神の觀念と計畫とに於て人類の合同することは是れなり、ウエスコット氏曰く、吾人の生活は一層大なる或生活の斷片たりと、(父の默示九十八頁)是れ則ち眞理にして、之を外にせば墮落及降生を理會するを得ず、最高の意義を以てせば基督は人類の單位と關係なし、蓋し人類はレアムフシモン自から贖罪に於る神の單位なればなり、故に口碑的信條は人類の有機的結合たる降生の基礎なる觀念を空虚ならしむるを以て止むなく之を罪責せざるを得ず。

然れども尙は一步を進めて言ふべきものあり、神に象り神の像の如く



に人間を造り其中に万事を包含すると、降生の驚くべき榮光と、贖罪の華麗とを思考すれば、吾人が爲し得る如何なる先見も人類を一全体と爲す所の運命に就ては宏壯に過るとなく又如何なる理想も高尚に過るとなしとの確信を生すべし。此等の高尚なる事實と對照せば、口碑的信條は應に自から呵責せらるゝ者として極めて陋劣の汚辱を負ふべし、其永く混沌暗黒にして救ひ難き零落に陥るとの使命は、創造の全き目的と本質とを拒絶するものにして、又有機的全体と爲す所の人類に對する降生の使命に違背する者なり。

此より贖罪アトメントの事を述べ、これは最後のアダムとして、基督の爲したる贖罪なり、基督は早晚全人類を自身に就らすのみならず、若し新にして優りたるアダムならば、其就らす所は全人類より少きことなるべし。故に余り重ねて言はん、口碑的信條は言語に就て言へば、實に聖書の贖罪と

拒否するものなりと、口碑的信條は普及救済を斷定するものなれども、實は普く救はざる救済、即ち基督が衆生を救はんとして失敗したるを謂ふものなり、然れども我主が眞に最後のアダムたることを否定し、又彼を群集せる万物に面し人と神使との目前にて不善の勢力と戦ひを挑み而して失敗したる者として論ずるは、其眞質を於て十字架を汚辱するにあらざして何ぞや。

多年の慣習は吾人を蠱惑してアダムが罪の遺傳に於て全人類と有機的に相連繫せりとの驚くべき約束の意味を生ずるに至れり。此連繫は普く結合せられ、如何なる決意力に依るも之を斷つ可らず。基督を第二(即ち最後の)アダムと稱するは人を誑すにあるか、然らずんば全人類に就き有機的及絶對的等分の連繫を斷定するものなり、然れども人はアダムの遺傳を脱し得る如く亦キリストの恩恵を脱するを得べしと言



ふ者あり、余ハ左の如く答へん、(一)若し基督の恩恵が唯アダムの罪と同一なるに過ぎずとせば果して斯の如くなるべし、是れ聖<sup>セント</sup>ポールの明に拒否せし所なり、例へば羅五〇十五より廿一に至る等、(二)人は遺傳を撤去し得るに先だち之を受領せし筈なり、是に由りキリストは人類を樂土に復す、非ずんば墮落の害惡を消滅せざるものなり、(三)口碑的信條の固く拒絶する所或は全く知らざる所の事實、而して第二のアダムは此の如きものに非ざるなり、(三)一部の失敗ありしに由り、豫知したれども好目的の爲めに放任したり、其失敗を救はんが爲め特に企てたる新神約も自から失敗すべしと云ふは不條理の處置なり、(四)最高最眞の意義を以て言へば神は決して失敗せず、又決して失敗するを得ず。

此處に於て甚だ通俗なる贖罪の二見解が論理上一層大なる希望に導くことを指示するハ當然の事なり、一説に曰く、基督ハ罪人に代て死せり。然れど

も若し斯の如く基督が正に万民に代て死せりせば、則ち万民は明に救済を受るの權利を有せり、若し代價を受納せられしときは、万民は放免せらるゝ權利を有せり、之と同じく基督の死を以て人類を贖ふ爲めに支拂ひたる代價なりせば、則ち其代價の領収は人類に明白なる救済の權利を與へたるものなり、既に代理を承認し又全く代價を受取りながら、如何なる場合に於ても、地獄にて反覆二回罰金を課するは全く不公平なり。此等の明白なる結論は世人の屢々知らざる所なり、世上に屢々主張せらるゝ所の奇異なる意見に今數言を附加せん、無限の贖罪は無限の罪科と無限の罰金とを假定すと言ふ者あり、之に答へて曰く無限の贖罪は寧ろ無限の愛と無限の希望とを假定して失敗の機會を成るべく有限の救主に除くものなり。余ハ既に人間の罪を無限とするの論に包含する不條理、非經典的の假説を示したり、(第九十二頁註)然れども罪の罰を無限なり(議論の爲めに)とするも我説は前の如く毫も影響を被らざるなり、蓋し罰は無限なるにせよ、將た然らざるにせよ、二回之を賦課するハ公平と謂ふ可らず。



吾人は此より聖餐禮を論せん、聖餐禮は降生の擴張せるものなり、降生の勢力は萬民を人類の首領に結合する所の聖禮法に依て自から擴張せり、<sup>ウ</sup>ルバールフォルス氏第十四頁天地に於て基督に於る万事の反復あるか如く、聖禮に於てもキリストに於る万事の反復あり、<sup>監</sup>督アンドリウ降誕の説教神學の語を以てすれば洗禮に於て基督と結合するの(聖餐禮に於て改新す)親密あるは聖レオの有名なる言の如し、曰く  
*(Corpus regenerati fit caro Christi)* 受洗禮者の身体は耶蘇基督の肉と爲ると、然れども若し果して然りとせば基督の眞の肉が無限地獄に輸送せらる可しと信せざるを得ず、又難哉譬へば耶蘇基督は其自身の肉を割き之を永く自身より分離す可きや、又寧ろ十分に之を説明せんとせば、基督は自身の一部を永く惡魔の社會に交付し得るや、と問ひざるを得ず、ケブルすら之を感じたるが如し、此等の贖の有様を考ふるに當り氏が

固着せる殘酷なる神學は崩壞して眞正の寛大心を起し、吾人に告るに「基督の最も少く且最も惡しき者も尙ほ希望ある事を以てし、又勸告的の語を以て、基督の記號は最惡の罪を以てするも消失せしむるを得ず」と言へり、余は再び此等の語が實に宇宙神教説を包含する所以を指示せざる可らず、蓋し我主の常に教へて曰く、彼に最も近づきて而も尙ほ歸順せざること恰も改悔せざるキリスト教徒の如き者は、決して彼を聞知せざりし者よりも、最終審判に於て最も惡しく待遇せらるべしと、次に降生を透ふて他の思想界に進み其光を於て復活を考察せん、復活は其身體に對する作用を十分に承認するも尙ほ實に之より以上にあリ、復活の人間の新生なり——<sup>ウ</sup>エスコット氏復活の福音、復活は贖罪の冠冕なり、(二)復活は心靈及肉體とも全く人を貫きて基督より受る生活なり、(三)最後のアダムに依り人間の全体を穿通する生活なり、<sup>ア</sup>ダ



ムに屬る衆の人の死する如く基督に屬る衆の人は生べし、基督に聚集せる生命はアダムに聚集せる死に反對し、又昇登は墮落に反對し、利益の損失に反對し、普遍は單獨に反對して人類と關係す、余は復活の眞觀念に包含するものとして是非共利益と云ふ、復活は何の爲めや、復活は唯基督に依りて來るのみ、基督の管に之を與ふるのみならず自から復活なり、生命なり、斯く基督と最も親密の結合あり、即ち復活は、天國を分與し在天の形像を保ち、又聖パウルの教へたる如く、生命、力、榮光、正廉、不滅の恩賜を基督より受るに在り、而して總て此等のものを分配するは是非共福祉を分配することなり、是れ余の重きを置かざるを得ざる要點なり、如何なる作用に依りて死亡、枯凋及害惡は基督なる復活の結果たるを得べきか、又死は經典に於て罪の結果の集合したる名稱なり、是れに由り死を廢するは復活に於る如く罪と其結果とを廢するなり、

然れども死は復活に依りて除かれ實に「吞」るべし、而して總て其完全なる意義に於る生活、基督に於る生活、基督なる生活、茲に交通せらるゝなり。

此に於て此復活の意見が我主の語、約五〇卅九、四十、五十四中に包含せられしが如き事を見るべし、復活は損失と相對し、信仰の結果と稱せらる、(約十一〇二十五、二十六參照)茲に我主が最終日に遷延したる復活の觀念を拒絶するを看よ、他處に於て我主の言へるとあり、誠に實に爾曹よ告ん、死し者神の子の聲を聞とき來らん、今その時となれり、之を聞者は生べし——(約五〇廿五)茲に吾人は此現在の復活を未來の復活と區別して基督の語の全力を破壊する普通の誤謬を防禦せざる可らず、我主に於ては毫もかゝる區別を爲さず、否彼の眞目的は寧ろ斯の如き區別を拒み、又復活の眞觀念は實に心靈上常に活動する力にして目前に



動作し、他日肉體靈魂精神とも全く人を變化上進せしむる酵母なりと教ふるに在り。尙ほ復活の觀念は其眞性より來る利益として我主の語と符合するが如し、(太廿二〇三十)可十二〇廿五(路廿〇三十五及六)同一の概念は聖<sup>セント</sup>ポールの教訓の基礎たり、若しイエスを死より甦らし、者の靈爾曹に住ばキリストを死より甦らし、者は其なんぢらに住とてろの靈を以て爾曹が死べき身軀をも生さべし(羅八〇十一)茲に復活は内部に住む靈より流出するが如く示さる、又斯くの如く聖<sup>セント</sup>ポールは復活を吉報として説き、(徒十七〇十八)而して復活と光を結合せり、(同上廿六〇廿三)但し改正譯書又有意の語を以て不義の復活を望めり、(徒廿四〇十五)即ち不義も義と共に復活の利益を分有せんとを望めり、蓋し審判の復活あるや疑なし、(約五〇廿九)吾人は喜んで之を承諾せん、とす、審判は吾人の知る如く救濟の大方畧の一部にして、治療的なると同時に

應報的なり、悔改せざる死者の處分に就き聖<sup>セント</sup>ポールは下の如く言ひて其意を暗示せるが如し、然<sup>サレド</sup>各人<sup>オノオノ</sup>その次序<sup>ツいで</sup>に循ふ、初はキリスト、次はキリストに屬する者なり、後<sup>のち</sup>かれ諸の政<sup>シヤク</sup>及諸の權威<sup>ケンリキ</sup>と能<sup>チカラ</sup>を滅して國を父の神に付<sup>つた</sup>さん是終<sup>さい</sup>なり、(哥前十五〇自廿三至廿四節)別語之を言へば、万人皆基督に於て生命を與へらるべし、但し適當の順序に於てす、(五章自廿二至三)基督の統御は其目的を達するまで延長すべし、(五〇廿五)即ち其目的は普及の生命を云ふなり、(五〇廿二)

此の如き説は廣く之を言へば聖書に與へられたる復活の見解なるか如く、又狭く之を言へば其所説は衝突を來すが如し、復活は哥林多前書十五章廿三節及黙示錄廿章六節に於ては順序に循ふとしたれども、哥林多前書第十五章自五十一至五十二節に於ては同時とし、約翰傳第五章二十五節に於ては現在とし、諸章に於ては未來として記載せらるる吾



人若し復活の本旨を以て全人類の上に及ぼす心霊的贖力と考ふれば、悉皆明瞭ならん、即ち其力たる常に存し常に働く、猶ほ同例の審判に於けるが如し、其力たる一個人或は諸種の人を變化するときは順序に循ふものなり、然れども終局に達し全體の人類蘇生し悉く至高點に達せしときは、或特別の意義を以て未來たり又同時たり。

余は最終に於て哥林多前書第十五章に於る聖ポールの大議論を一層精細に審査すべし、其處に教へられたる至要の二點あり、即ち第一、聖ポールの一般の死者即ち全人類の復活を説きたり、第二、彼は凡ての場合に於て復活の活し痊す力を説きて、此治療作用以外の復活を知らず、第一、此使徒が凡ての復活を説きたるは其言語に依りて明なり、曰く、アダムに屬る衆の人の死る如く基督に屬る衆の人は生べし、十五〇廿二と、此處に彼は人類と共に擴がり罪と共に擴がる作用を明記し又歩を進

めて此一般の關係を明言し、生命は衆人皆一度に之を得べからずと雖も、各人その次序を循ふと説きたり、彼は衆人を分て先づ基督に屬する者を取り基督の力に依り復活を得るとなせり、それより終局に至るまで漸次に從へらるべき事物に移り、十五〇廿四終に何物にても何處にても總て基督に從ふべき者に論及せり、此事は就ては哥前十五〇自廿五至廿八節、弗一〇十、西一、自十五至廿、腓三〇廿一——第八章に於る説明を看よ、終尾に甚だ著しき語を以て結び、曰く萬物彼基督に從ふときは子も亦自から萬物を己れ(基督)に從はし、者(父)に從ふべし、是れ神凡ての物の上に主たらん爲なりと看よ、基督と天父の間に存する關係と同一の關係は終り萬物全體の間に存し、何事に據らず何處を論せず、同一の原語を双方に用ひたり、此使徒の語の終局に於て一も例外なきことを認め、衆皆基督の爲めに生命を與へらる、故に、第一、第二を



論せず何物も死なきとを認め、衆皆回復せらるゝ故、一も滅亡なきとを認め、道徳上或は有形上の害惡の汚染一も之なきとを認めたるものなり、而して終ゝ大結果として言へらく、神の萬物の上に主たりと。

思ふに斯くの如く復活を以て福祉を傳ふる心靈の力なりと爲す概念は數多の古代記者の説く所たり、此教訓の起源は恐らく惡人の滅亡を教へ復活は正義の人に限ると思考せし諸教父の案出に係るならん。(百八十八頁に引用せるクレメンヌ、ローマナスを看よ) 聖、イグナシアス曰く神の恩賜に背く者は、彼等の争に於て死すべし、是れ彼等を愛する爲めに寧ろ勝れりとす、蓋し彼等は蘇生し即ち復活を得べければなりと。

—(Ad Smgry. vii. See also. Ad Trall. ix.)

聖、ホリカール曰く基督を死より蘇生せしめたる神は若し吾人にして神意を爲せば亦吾人を蘇生せしむべし。(Ad Phil. iii.) 使徒の教訓も亦明

に然り、(二百九頁) アンテオケのセオフィラスの教義に據るに神の誠を守る者は、救はる可し又復活を得て清潔を享くるを得べしと。(Ad Aut. iii. 27) 又アイレニヤス(百八十九頁)も實に同一の意見を抱きたり、アルノピアス問ふて曰く不死なる者の苦痛を被ひる可らず、之を反し苦痛を受る者の不死なる能はずと云ふ事は孰が之を知らざる者あらんやと。(Adv. gen. ii. 14.) 此等の諸教父の外吾人は復活を以て其眞質より來る回復の作用と爲すの意見を維持すべき夥多の舊證を發見せり(アセナゴラス「百八葉」メソヂアス「百十一葉」を看よ) 又聖、ヒレリーは下の如く言へり、曰く「罪の律法より人を贖ふに依り、神を衆人に對する稱讚の目的と爲すに依り、又總て永遠に亘り吾人不死の賜物と品位に依り、死の終りに來るとき天地の万物を將さす神に調和せんとせしは唯一の出生子なり、今復活の力は總て此諸事を完成す」(In Ps. lxxix, p. 834 (Paris, 1652))



ニサの聖セントグレゴリーは下の如き教訓に富めり、復活は吾人の本性を其本原の状態に回復することなり」と——*De an. et Res. ii., p. 684.* 故に陶工の瓶の如く人は再び粘土に溶解せらる、是れ復活に依り更に其原形に模塑せられん爲めなり——*Cat. orat. ch. viii.* 「吾人に固着せる罪の永續せんとを恐れて仁恵なる攝理に依り一時死に依て器具を鎔解す、是れ人類を改造し罪の混和物を除去して其最初の生活に回復せん爲めなり、されば復活は即ち吾人の本性を其最初の状態に復するを云ふ」——*In Jan. Pulch. ii. p. 955.* 聖セントアムブローズ氏の教義に據るに「復活は死に依て罪の終る事と與ふるなり」と——*De bono mort. ch. iv.* 「復活は總て悪魔の羈絆を解くものなり」——*In Ps. xlii.* アムブロンヌスター氏も亦斯く言へり「罪の廢止に於て死者の復活成る」と——*In Col. ii.* 古代の一記者曰く復活は吾人の性質を再造することなり」と——*De Sacr. iii.* シンナ

ダイアス曰く「罪を犯さるといふ不死無感覺の性質に屬す」と——*In Rom. vi. 12.* アレキサンドリアのクレメントも同調を以て之を言へり、(*See Paed. iii. ch. 1.*) アンチオック派も固く此復活説を主張せり、ダイオドラスは二百八十五頁にセオドールの二百九十八頁に引用せしが余の茲に後者より下の言を附加せん、曰く「基督が復活を與へたるは吾人を不死の性質に置き凡ての罪を脱して生活せしめんが爲めなり」——*In Rom. vi. 18.* 「使徒は終に死すべき者は罪に従へども不死と爲る者の罪を免ると云ふ事を證明せり」——*ib. viii. 36.* 死者の復活は最後の最大なる善なり、——(*ib. x.*) セオドレットも同精神を以て言へらく「未來の生活は於て身体の清潔不死と爲りしときは罪の汚穢を入る可らず」——*In Col. ii. 11.* 「蓋し復活の後吾人の身体清潔不死と爲るときは神恩に統御せられ、罪の入るべき餘地なし、蓋し苦痛(愆情)の復活に依りて終るときは、一も罪



を容るべき位地を有せざるべし』と——*In Rom. v. 21.* 斯く考ふれば實又一層明白なる光を救世主の語に發すべし、余は復活及生命なりとの吾人の信條に反響せる語なり、余は死者の復活と永生を信ず、復活は凡て永生を致さしむるものなり、吾人は便宜に依り復活に次で死、滅亡及消失を罪障の一部なりと説く所の問題を考究せんとす、其真意を明にせんには先づ死とは何の謂なるか之を研究せざる可らず、之に就き通例二條の答あり、第一は通俗の信條にして罪人の場合に於る死は永く苦難に存するの義なり、と云へり、斯る教義より一轉して「死は滅亡の意なりとの第二説を生せり、而して今尙ほ之を主張する者あり、余は十四頁及十八頁に於て既に此説に就き言ふ所ありたり、若し之を一讀せば思ふに其説の全く聖書上の死の眞觀念に違背するを示すならん。

先づ余はウォーケス氏の言を假りて問はん、聖書が人の不慮の事件として説きたる種々の死は孰れも皆其無有或は滅亡の意なるや、其例として羅馬書第六、第七、及第八章に於て聖ポールが説きたる死を擧ぐ、曰く(第六章七節)「死し者は罪より釋さる」と、此罪より釋さるゝ死は果して無有或は滅亡の謂なりや、又曰く(第七章九節)「われ昔し律法なくして生たれど誠命きたりて罪は活かへり我は死せり」と、此律法に依り彼に及ぼしたる「死」は果して滅亡なりしや、又曰く(第八章六節)「肉の事を念ふは死なり」と、此死は無有或は滅亡なりや、又曰く(第八章三十八節)「死生共に我儕を絶たさざるべし」と、此處に謂ふ所の「死」は滅亡なりや、アダムは罪を犯せし日に死せしが(創二〇十七)是れ滅亡なりしが、彼の体は死して塵埃に變じしも、こは滅亡なりしか、我儕の「愆」罪に於る死(弗二〇一)は滅亡なるか、我儕の「罪」に於る死(羅六〇二)は滅亡なるか、此等及之に等しき用語法は疑なく死が如何なる者たるにせよ、一も無有或は滅亡に非ざるを證明するにあらずや。

然れども若し死を以て永く苦痛を存するに非ず、又滅亡にも非ずと



せば、則ち何をか死と云ふや、死とは狹隘の形狀を以てせば、身体の分解なり、人に於ては其生存したる生活の、或形狀より分離するとなり、存在の一状態より他の状態に移る行路なり、斯く理會せば、死の如何なる場合に於ても、焉んぞ希望を絶つべけんや、死の實に生活に反するものに非ず、若し一層真正なる一層高尚ある状態を以て之を見れば、實に生活に於る行路なり、否、生活の眞の状態なり、一粒の麥もし地に落て死すべし、惟一にて存せん、もし死ば、多の實を結ぶべし、(約十二〇二十四)茲に暗示せる一大眞理は一般に應用せらるべきものならずや、其關係は死生間の甚だ眞實にして活力ある關係ならずや、而して使徒も亦言へり、死し者は罪より釋さる、(羅六〇七)即ち神に就て生るものなり、畢竟此罪に對して恐嚇せられたる死は苛刻とはいへど、亦彼等の生活に於る行程なり、是れ聖<sup>セント</sup>ポールの言の如し、彼等の復活の死たる者の中より生るに

同じからずや、(羅十一〇十五)通俗の意見に據れば、斯かる意味の語は總て實力を失へり、然るに全く虚妄なる口碑殆んど一般に流布し、死を以て吾人教育の終局と爲し、基督自身も之を越へては固執の罪人を救ふべき力なく亦其意なき一境界を示すものと看做せり。

余答へて曰く、此説たる古代教會の教訓と新約書の用語と於て文字精神ともに等しく演繹法に背けり、實に死に就て一層真正なる説を教ふるは福音書の緊要なる一目的たるが如し、死は實に吾人の旅行するに當り一宿驛より他の宿驛に經過することにして、終局に非ず通路なり、生活の中腹として其末尾は非ず、末端は非ずして起端なり、吾人が總ての生活の中心たる生活に入るに當り、吾人の靈魂の吸入する第一の氣息なり、(エドウィン、アーノルド)死は恰も吾人が其感覺に依りて現物を測定するに當り猶豫なく之を判斷するが如く、蔭なり、夢なり、生活に非



す。ウエストコット氏父の黙示九十四頁死の日は古代の教會に於て眞正の性質を依り生の日と呼ばれたり。吾人の教育が死に於て終ることを教ふるは猶ほ小兒の教育が哺乳と共に終ると言ふが如し。

故に余は問へん、通常の教理と古人の知らざる所又聖書に記せざる所なるも、而も如何なる憑據を以て之れを教ふるや、誰か死の基督の恩恵の到達せざる状態に陥るものなりと教へんことを委任せしや、若し其事ありとせば基督が獄中の精靈に福音を傳へたる事跡を寓意的に相傳説するは何ぞや、又何故に不従順の生活を爲して死亡したる者を特別福音の講話に撰擇せしや、何故に使徒は福音は死者にさへ宣傳へられたり」と云ふ事を吾人に話せしや、——（彼前四〇六、夫の教權を與へられたる譯書に於て掩蔽せられたる一事實、何故に下の如く「オー陰府よ爾の勝の安くにありや」「オー死よ爾の刺は安くありや」と反復歡喜す

る間を發せしや、若し死を以て常に基督の救濟力を停止するものと爲さば、新約書が彼の種々の説明を以て基督が死を絶ちたる事實を（特別の緊要として）吾人に強ふるは何ぞや、若し死が如何なる場合に於ても基督を無力無能と爲し得るものならば、基督は如何して死の勝利者たるを得べけんや、死は其勝利者の勢力を奪ひ得るか、聖ポールの所説は大よ之れに相違し死が生活の状態なるを示して其同性なるを唱へたり、爾愚者よ爾が種撒きたる者は死するよ非ずんば活かされず」と——  
實に

損せざれば利益を得べからず。 "There is no gain except by loss,"

死せざれば生命を得べからず。 "There is no life except by death."

此眞理の運用を制限するは何人ぞや、是れ確實に心靈的品位にも適用すべきは吾人の保證する所なり、聖ポールは既に引用せる章句に於て



死を以て罪より免かるゝものなりと説きたり、更に其例證を擧ぐ、我儕もし彼と共に死せば彼と共に生べし——(提後一〇十二)我儕生者の常よ耶蘇の爲に死に付さるゝは耶蘇の生ることを我儕に顯ひしむる也——(哥後四〇十一)而して我主も斯く言へり、其生命を失ふたる彼は之れを救ふべしと、此一言は福音書に復説するものに優れり、又使徒も之れに附言して曰く、若し身軀の行爲を滅さば生べしと——(羅八〇十三)聖詩の作者も亦特に祈りて曰く、悪人を亡び失せしめたまへ、蓋し彼等をして神が全地を統御することを知らしめん爲めなりと(詩八十三〇十七至十八)又左詩を看よ、神彼等を殺したまへる時彼等神を尋ねたりと(詩七十八〇卅四)オリデン氏之に下の如き註解を下して曰く、神は他人が殺されし後或者神を尋ねしと言はず、然れども殺されし者の滅亡は彼等が死に處せられしとき神を尋ねし所の性質なりと言ふなり。

(De prim. ii. ch. 5, iii.) 故にエラムも亦初めに滅され、後に回復せらるべし(耶四十九〇卅七至九)カナン人も滅さるべしと雖も尙は回復せらるべし(番二〇五至七)アムモン人も永く滅されし後に返さるべし(番二〇九及耶四十九〇六)故に死骨も生さるなり(結卅七)又イスラエル人も其墓より出来るなり(同處五〇十三)母上二〇六參照)

\* 舊約書に於ては死と滅亡の恐嚇ハ重に現世的なり、然れども同一の原理は新舊兩約書に於る神の經理の基礎を造り、本章の引證をして頗る著明ならしむ。

斯の如く吾人は死が神の罪人を活す器械其物と爲る所以を知り、死に二種あるを學べり、(一)肉軀の死、即ち人を現世より取去り、之を醒し救ふ爲めに一層適當なる状態に入らしむると、(二)精靈の死、即ち神の嚴法に依り其治術を以て反覆審問せられ、終に罪惡あれば死し、正義あれば生



ると是れなり、總て此の死の問題に於ては一般の定説極めて狹隘にして、恰も死の事實を以て神の不變の目的を變し得るものゝ如く、其不朽の愛を以て吾人が生存の新状態に入る爲めに消滅したるものゝ如く、基督の十字架の力を以て暫時の現世に於て消耗したるものゝ如く云へり、豈にそれ然らんや、基督は死を廢せしにわらずや、彼は死者の主にあらずや、彼は死者に福音を宣傳へしにわらずや、彼は死の鍵を有せしにわらずや、通例の見解を以てするに此等の語は如何なる深意を示すものなりや。

然れども第二の死なしと言ふ者あらん、實に然り、然れども嘗て第二のみならず、第百、第千の死ありども、それは唯死なるのみ、而して死は全く各々度と力に於て絶滅せられ除去せらるゝなり、然らずんば聖、ポールの凱歌(哥前十五〇五十五)に於て毫も眞意なからんとす、若し第二の死を

以て基督の力の及ばざる所なりとせば眞の勝利は一も基督に依りて得られざるなり、吾人の反對論者は死が勝に吞まれて而も尙ほ其最悪の状態、即ち第二の死に於て存在し得る所以を説明すべきや、之に就きマーテンセン氏の所論は頗る其當を得たり、曰く「死は制服せらるべき最後の敵なり」と聖、ポールが教へし時、此死に第二の死を包含せしや明なり、然らずんば尙ほ他に制服すべき敵なくんばある可らず」と。(Dogm.

Chrest.)

古代の定説は大抵下の如し、曰く罪人の「死」と「滅亡」は其自身の工事を改造する大技師なり、治療を事とする醫師よして滅亡を宰る者よ非ずと、罪人を粉碎し、滅亡し、殺戮すると云ふは總て改革の義を表はすものなり。

\*異教の鬼神論に於るアポロと云ふ神は治療者にして又破壊者なり。



以上は一群の著名なる人即ち大抵新約書の文字に習熟すると恰も其日常の用語に於るが如き人々の證言なり、クレメントも亦曰く、罪人を死に處する法律は之を死より生ゝ導かん爲めなりと——(Strom. lib. vii. p. 707.) オリヂンの説は既ゞ之を引用せり、聖メッヂェアス曰く、經典の慣習の唯一層善良に變化する者を滅亡と名くるなりと——(Ecc. EPIPHAN. Adv. haer. ii. tom. i. § 32.) アイレニアスは死を最終の罪と説けり、——(Adv. haer. iii. 23-6. ニサの聖グレゴリも同様の教訓に富めり曰く、肉に生活する者は徳義の交通に依りて自から肉慾を脱せざる可らず、若し然らずんば死後己れに残存粘着せる肉慾の不徳を除去する爲めに再び他の死を要すべしと)——(De anim. et Res, ii. p. 652.) 是れ第二の死の治療作用を示すものゝ如し、聖詩の作者が罪人と不正者を滅さしめよと祈るとき、彼は(實に)罪と不正の滅亡すべきことを祈るなり——(De orat. Or. i. p.

119. 又曰く、若し其他(經典に於て)斯の如き祈禱者あらば、そは正に同一の意義なり、即ち罪を除くの義にして人を滅すの義も非ず、ナジアンザスの聖グレゴリに就ては二百三十七頁を看よ、又セント、ベシルに就てハ二百四十三頁を看よ、ヒレリーの引證も同一の結果に外ならず、ユウセピアス及ルフィナス、マカリアス、コグチス、ポストラのタイタス、アレキサンドリアのクレノント、クリゾストム、及アレキサンドリアのサイリルも亦然り、其他マクシマス及デイデイマス及ヒアムプロズも亦之に算入すべし、(自二百五十五至二百五十八頁)而して之よりも強固なる證言を列舉せんとするは殆ど爲し難き事ならん、今聖セロームの説を舉ん(二百七十七頁を看よ)凡て神の敵は滅さるべし、神の敵ハ亡びて生れざるべし、但し彼等が敵とする者に於て亡ぶべしと、加之聖セロームは「罪ある人」の救済を説くが如し、曰く恰も神が其口の氣息を以て殺



さんとせるテッサロニアン人に罪ある人に就て(聖)ポールが書を送りし如く、此殺すと云ふは滅亡の義に非ずして従前汚染せる悪しき生活を停止する義なりと。(In Mic. v. 8.) 余はアムプロシアスターより左の言を擧ぐ、彼等は亡ぶべし、彼等は一層善良に變化せらるゝ時亡ぶべしと。(Heb. i. 11.) Sibylline Books, に於ても亦悪人は初め死して後救はると言へり。(Zib. ii. vv. 211, 250-340.)

又死を罪人に對する恐嚇なりと解して誤まるとなくんば、其理の最も極端の形狀に於ても審判に適用して大に誤るとなし、此點又就き聖書中に甚だ明晰なる教訓なきに非ず、聖(セント)ベシル曰く、聖書は到る處神の正義を其慈悲と結合すと。(In Ps. cxvi. 5. 或意義に於て審判は憐憫に反對するとあらん、(S. Jas. ii. 13.) 然れどもこは本質に於るより寧ろ皮相上の觀に屬せり、一例を擧ぐんに死は聖書に於て屢々生命と相反對すれ

ども、而も生命に達する眞の通路なり、(三百八十四及九十頁を看よ) 審判の來るや若し神より來れば愛の使者よて來るなり、茲に二種の神學の間に心靈上の分水界あり、通常の神學は云ふ神は其敵の死するまで之を愛し、然後神の愛は憎惡及復讐に變ずと、實に神の愛は史學上の一疑問なり或は地理學即ち此世界に限りたる一疑問と云ふも可なり、而して茲に一層眞正の神學あり、聖書と共に教へて曰く神は愛なり、其愛は終始不變として無窮なりと。

聖書は録されたる第一審判に於て憐憫は相一致して進めり、若しアダム死すべくんば憐憫之に伴ひ、蛇頭破碎せらるべし、故にソドムに於る限なき火の罰も亦其恢復の日に終るべし、(猶七、結十六〇、五十三及五) 吾人は斯の如くして神が自からモーセに示現したる憐憫と審判に著しく接近するを覺るなり、(書卅四〇六至七) 吾人は同一の關係を(申卅二〇



卅五至卅九に於て見出すべし、(羅十二〇十九至二十を参照せよ) イスラエルの士師も亦救者なりき、(士三〇九、阿廿一) 今余が主張する説に就き一層美麗なる説明を求めんとせば、アカンがアコル(惱の谷に於て家族等と共に恐るべき審判に依り石にて撃殺されし談話に若くものなし、(書七〇廿四至廿五) 蓋し何二〇十五を見れば下の如き勸告の意を含める約束を見出すべし、曰く、余は彼にアコルの谷を望の門となして與へんと、今若し眼を聖詩集に轉せば、神が審判に来るは深く喜ぶべき事たるを知るべし、(詩六十七〇四) 加之聖詩の作者は(詩九十六〇十一及三、全九十八〇四及九) 審判の有様に於て(贖罪の大方畧の一部なりとして) 告て曰く、海は鳴響き、大水は其手を拍ち、諸山は歡び歌ふべしと、而して彼は神の審判を望み、(詩百十九〇四十三) 又自から之を以て慰めたり、(全〇五十二及六十二、詩九十七〇八を對照せよ) 詩二〇八及九に就ては余既に

に之を言へり、口碑的信條は基督が異教徒を其嗣子と爲す事と、之に加へたる恐るべき審判即ち、之を粉碎するてふ審判とを如何も全く調和し得るや、之を知るは頗る面白き事ならん、救が神の審判と連結する事實は聖書を研究するに從ひ益々明白となるべし、而して又之に反し神の憐憫の中にも畏懼すべきものあり、爾に慈悲あり、故に爾は畏れらるべし、(詩百卅〇四) 此精神を以て吾人は左の勸言を讀まん、聖詩家曰く、あゝ主よあはれみも亦なんぢにあり、なんぢは人おのくの作にしたがひて報をなしたまへばなり、(詩六十二〇十二) 茲に疑問の本質あり即ち應報は憐憫なり、審判は救済の義なりと是れなり、マウライヌ曰く「神が罰を止むるの思想は眞實言ひ難き恐怖なり、忿怒は愛に逆ふ力にあらずして其屬性なり」とされば、詩六十七〇一及四は神の救のもろもろの國に及ぶことに關し神を審判者として吾人に示せり、詩七十二〇



一、二、三及十七は於ても審判は一般正義の治世を導くものとなせり。又詩九十九〇八に於ても報讐と赦免は併び行はると言へり。詩百一〇一は憐憫と審判を結合し、詩卅三〇五は審判と仁慈とを結合せり。又言へらく、爾の審判は大なる淵なり。オー神よ爾は人と獸とを護りたまふと。  
〔詩卅六〇六〕

預言者は之と同様なる教訓に富めり、以塞亞書中イスラエル人に與へたる慰め及赦しの語を看よ、その諸の罪によりて受し所は倍したりと。  
〔賽四十〇一至二〕曰く、シオンに正義をもて贖はるべし。〔賽一〇廿七〕爾の審判地に行はるゝとき、世は住める者正義を學ぶべし。〔賽廿六〇九〕その君たちは公平をもて宰とらん、又人ありて風の避所とならん。〔賽卅二〇一至二〕われわが途をかたく定めてもろくの民の光となさん云々わが救はずでに出たり。〔賽五十一〇四及五〕これにより上りてのちなんぢ

らを憐みたまはん、エホバは公平の神にましませり。〔賽卅〇十八〕又曰く「エホバはシオンに公正を充せたまひたり、救はゆたかにあらん。〔賽卅三〇五至六〕エホバはわれらを鞠きたまふもの、エホバは我儕を救ひたまふべし」と。〔賽卅三〇廿二〕吾人は斯く審判と救済との關係の聖書を貫通するを見るべし、賽四十五〇廿一及二を見るに、神は正しき神又救主と記載せられたり、尋て言へるあり曰く、地の極なるもろくの人よ、來て我を仰き望め、然らば救はれんと。之と比較して亞九〇九正義して拯救を賜はり及約壹一〇九神は公義者なるが故に我儕の罪を赦すべし。の二節を看よ、斯の如く吾人の審判を解して將來平和と愛との神國を建立するに關係あるものと爲すなり。〔賽二〇二至四〕又吾人は神の統治と救拯の基督に於る關係を輕々よ看過す可らず。〔賽四十〇十及十一、全九〇七、詩百三〇十九及廿二〕又救の兜と仇の衣の接近を看るべし。〔賽五十



九〇十七又めぐみの年と刑罰の日も共々相連結せり(賽六十一〇二賽四十二〇一至十二)新約書にて基督に適用したるに於て神は審判を地上に置くに記載せられたるを見る(五〇一)然れども其結果の救なり(五〇七至十二)又他の預言者は分派として基督を説て曰く、彼は公道を地に行ふべし、その日ユダの救を得べしと(耶卅三〇十五)又われ公義と憐憫をもて汝を娶り永遠にいたらん(何二〇十九)但七〇十至十四に於ても基督に期望せる一般の統治は審判の日と密に關係せり、結廿四〇十三及四に於てもイスラエル人に就て言へるあり、わが怒を汝に洩しつゝすまでは汝その汚穢をはなれて淨まることあらじと。

今引用したる句節(及其續節)は死と滅亡に就き經典上の意義を説明する爲め既に述べたるものと比較すべし、吾人若し最眞實なる意義を以て審判は現今より未來に續き間斷なしと云ふ事を記憶せば、恐らく眞

正の審判説を得るの助となり、ジョサファ谷の裁判所は毎夜吾人の爲めに開廷す——(スウエチーヌ夫人)エマルソン曰く、世界は審判日よ充てり——(Spirit. Laws)

今吾人は新約全書に移らん、新約書に於ては吾人が最も綿密に研究すべき價值を有し且審判の眞意即ち現今將來共に等しく救を與ふるとを示す所の許多の證據あるを見るべし、例へば世人の熟知する我主の名言(約十二〇卅二)の語勢を看よ、斯世は今罪に定めらる、斯世の主は今逐出さるべし、我もし地より擧られなば萬民を引て我に就せんと、即ち世界の審判は世界の救拯なり、万民を基督に引寄せらるなり、故に若し基督の來りしは世の罪を定ん爲めに非ず世を救んが爲めなり(約三〇十七)と云ふ事を排斥する者あらば、吾人は前文の外に明白なる説を指示さん、約九〇卅九に曰く我審判せん爲よ世に臨ると、元來救は基督の目



的なれども實際此救は屢々審判に依て得べしと云ふ事を心に記臆せば、凡ての疑團氷解すべきなり、太十二〇十八及廿一を見るに眞道をして勝とげしむるは我主の目的なりと説けり、又約五〇廿一及二に於て審判と甦生との關係を見るべし、聖パウルが最後の審判を説き、斷乎としてその大なる日こそ鞠かるる衆人に救を致すべしと示したる言の如きは甚だ著しきものなり、羅十四〇十を看よ、我儕は皆キリストの臺前に立べき者なりと、是故に我儕各々己の事を神に誣へざる可らず、然れどもそれは夫の審判の唯一の目的ならんや、其主要の目的は則ち救にして之を示すと難からず、聖パウルが神の審判の目的を説明せん爲め賽四十五〇廿三より引証せし所を看よ、曰く地の極なるもろくの人は己をさして誓ひたり、凡ての膝はわが前に屈せん、この言はたゞしき

口より出てたれば反ることなしと、そは成遂けられざる可らず、即ち神の救の目的は十分全人類に到達せざる可らず、然れども此普及救済の預言説は使徒の引證する所にして彼の所謂審判日と連結せり、聖パウルは夫の審判に於て人間の最終の墮落を認めざれども、預言の約束即ち其救が各人の靈魂に及ぶべしとの約束の完了すべきを認めたり、乞ふ一考して此充分なる意味を曉るべし、墳墓を越へて遙に閉鎖せる舞臺を望み、生活罪及贖罪の大戯曲を包藏する審判を觀察するは吾人聖パウルに於て之を見る、而して此使徒は之を觀るに當り眞の審判に於て救の作用を認め、各人の靈魂に希望を以て輝く有様を認めたり、而して其有様は預言者の悦ばしく呼びたる地の極なるもろくの人は我を仰ぎ望めば救はれんと云ふ言に依るに非ずんば之を記述すべからず。

† 信條にも言へり、彼は活物を死物を裁判せん爲め來るべし、其國は終りな



るべし」と。故に審判は基督の一統する國を建立するに導き、而して斯く(意を  
含んで)審判官は白き寶座(親愛の表號)に坐すべし(Rev. xxi. iii.)

以上の事を悉く腦裏に貯ふれば、聖パウルが福音を以て、救の爲めにす  
る神の力なり、蓋し其中に默示せられたる神の怒あり」と説きたる言は  
(通常の見解にて)理會し難きも釋然として明瞭ならん、看よ救と怒の  
共に連結せり、救のあるは神の怒が凡ての罪に對して現はさるればな  
り(羅一〇十六至八)而して此關係の吾人の翻譯に於て經文の措置に依  
り掩蔽せられたるものなり、又羅十二〇十九至廿一を看よ、其教ふる所  
は眞正の神の復仇は善と親愛とをもて惡に勝つことなりとの意を含  
むや必せり、而して其處に引用したる申卅二は神の復仇の治療性を謂  
ふものなり、次に聖、パウルがヒメナヨとアレキサンデルの場合に就て  
言へる所を看よ、提前一〇廿彼等は罪を犯せし故よ、彼等<sup>を</sup>をサタン

に交付せりと、彼等は信仰を失ひたるを以て使徒の權威に依り神の教  
會より逐出され神の敵に交付されたり、豈に之よりも更に失望すべき  
状態あらんや、然れどもこは果して何の爲めか、彼等をして誹謗せざる  
とを學ばしめん爲めあり、一老教父の言へる如く「罪人が惡魔に交付さ  
るゝは何の爲めぞ、彼等が永く死すべき爲め歟、若し然らば神の憐憫は  
何處に在りや、慈悲なる父は何處に在りや、使徒の言ふ所は次の如し、余  
は罪人を惡魔に交付せり是れ惡魔の責を受けて余に改心せしめん爲  
めなり」と——(In Ps cviii. 9 in S. JEROME)之に等しき著明の一例は姦淫の  
聞ある哥林多人の場合に在り、余は既に斯の如き者をサタンに交付し、  
其肉体を滅し、其靈をして救を得しめんと定たるなり(哥前五〇三至五)  
而して其處置宜しきを得たる故に此惡しき哥林多人は惡魔の手に交  
されて惡魔の手より交されたり、其他新約書にの尙ほ少許の告知すべ



き言詞あり、此處に於て一人は使徒の教權に依り基督の名に頼りてサタンに交されたれども、其目的と結果とに注目せよ、蓋し死を計るに非ずして生命の爲め、即ち神の恐るべき審判に依て生命を得んが爲めなり、<sup>1</sup>「オー我靈魂の安然として靜に永遠復仇の日を待てり、是れ基督の日なり、是れ基督の復仇なり、故よ是れ滿願の日なり、是れ愛の復仇なり」— G. MONOD, *Le judgment dernier*. p. 28 此關係に於て神の審判の極めて嚴酷なる想像が最後の救と一致する所以を示さんが爲め讀者の記憶を乞ふべきものは、セント、パールがイストラエル人に就て「極めて大なる怒彼等に臨れり」撒前二〇十六と言ひし理由なり、パールは神の恐極めて大なるもイストラエル人は皆救はるべしと吾人に告げたり、能く此語を含味せよ、恰も神は怒の壘を飲盡して最早爲すべき所の餘地なきが如きも而も其怒と總て希望の終り救の得難きことを謂ふものなる歟、否是

れ眞に反對の意味なり、至大の救はイストラエルは皆救はるゝ故に、至大の怒の終極なり、全く顯著にして恐らく一層趣味あるものは、基督が獄中の靈魂に説教を爲したる事跡を陳述したるペテロの言なり、其靈魂は特に不從順なる死者の靈魂なりと録せり、而してペテロは之に附加して曰く、蓋し此理由は死者にさへ説かれたる福音なればなり、是れ肉に於る人に據り罪を定めらるゝも、靈に於る神は從ひ生活するを得んが爲めなりと、即ち罪に死したる者も審判の利益を受け以て神に生活し得んが爲めなり、茲に吾人が知り得たる者三ヶ條あり、第一罪人に及ぼす審判は刑罰に非ずして生活なり、第二審判に依る救ひ此生涯を超へて遠く延長し、第三生活の際最大有益の訓誡を怠り、悔改せずして死したる者にまで延長せると是れなり、以上の所説は皆通常の悔改せずして死せし者の



未來説に正反對を爲せり。又、耶穌の歸るとき、万物の復興せん時來らん、  
 (徒三〇廿一)然れども彼の歸るは活物と死物を審判せんが爲めなりと  
 云ふ事は識者の更に意を注ぐ所ならん人吾は終に左の言を引用せん  
 「我また一人の天使を見たり、彼地に住む者に宣傳へん爲めに永遠ある  
 所の福音を携へて曰ける、神を畏れ榮を之歸せよ、蓋神の審判し給  
 ふとき既に至ればなり」と(黙十四〇六至七)此、宣傳ふる永遠の福音なる  
 語に注意せよ、果して如何なる意ぞ、蓋し神の審判に依るなり。  
 此審判説の正しく余が茲に述べんとする往古の寛大なる諸教父の教  
 義なり、其證として聖ゼロームが番三〇八至十に於る著しき註解を舉  
 ぐ、彼は審判の日と其恐怖を説て曰く、衆多の國民は審判に招集せらる  
 れども、國王即ち誤謬なる教條の主唱者は刑罰の爲めに誘引せらる、是  
 れ主の猛烈なる忿怒を悉く、彼等に注がん爲めなり、而して是れ殘忍な

る猶太人の想像する如く殘酷より爲すに非ずして憐憫と醫療すべき  
 計畫より爲すものなり、蓋し國民を審判に招集し國王を刑罰に招集す  
 るは彼等に怒を注がん爲めなり、其怒の注ぐ所は一部分に非ずして全  
 体に在り、而して忿怒と猛烈は總て地上の粗物を全世界に燒盡さん爲  
 め共に結合せり」

(\*セント、シエロームは基督の最初の來臨の章を理會するは爲し得べきと  
 なり、附言すれども明に上文の説を採用せり)

其企圖せる(且到達すべき)目的は(進歩するに從ひ)各々の人其誤謬を去  
 り、各々の膝耶穌の名に於て屈する事に在り、余は此等の語の至極の意  
 味を指示せざる可らざるか、此等は明白に了解し得べきのみならず、語  
 勢を強めて「神の猛烈の怒、怒と猛烈との全塊」と云ふも妨げなし、然れど  
 も是れ救の一方法なり、火の如く燃へて神の仇敵を燒盡すべき大なる



怒の日は、各罪人又救を與へて唯此世の粗物を燃すのみ。

又聖<sup>セント</sup>ゼロームが羅一〇十八に於る註解を看よ、左の如く言へり「其中に凡て悪業に對して現示せられたる神の怒あり」怒を示現するは之を蒙らしむる爲めに非ず、怒は責罰せず、然れども恐怖せしむる爲め、又恐怖せる者に蒙らしめざる爲めに現示せらるゝなり、*In Hab. iii* 彼と米七〇十七を註解するに當り悪人を蛇に比して言へり、蛇は地を匍ふとき自体と共に泥土を曳行くべし、之と等しく悪人は、惡事の身に附着する間苦難を受くべし、然れども(審判は依り)之を除去せし時は神を恐るゝと止まん。

ニサの聖<sup>セント</sup>グレゴリーの教義も等しく強迫的にして明白なり、故に神の審判は罪を犯したる者に刑罰を加へざれども唯惡を避け幸福に導きて善に化するのみ、別語之を言へば、刑罰は治療にして侵入せる罪の元

素を除去するに伴ふ所の免れ難き苦痛なりと、——(*Dean of Res. ii. p. 659.*)  
又曰く若此世よて罪を治療せずんば其治療は未來に延期せらるべし、神は靈魂の病の治療に對する未來の審判を以て慢性症に對する激しき治療の如く告げたり、而して(此等の語に注意せよ)其審判は吾人が恐怖に依りて惡を避るに至らん爲めにする鎖細無益の一威嚇なり、然れども更も聰明なる者は審判を一醫藥なりと信じ、即ち神が自から造りたる萬物を最初に存在したる恩惠の状態に引戻さんとする治療法なりと信せり——(*Cat. orat. ch. viii.*)

十聖<sup>セント</sup>グレゴリーは審判日の恐るべきを拒むの意なし、彼の語を聽け「万物皆戰慄す誰の恐怖せざる者あらんや」——(*In verba Fac. hom. Orat. ii.*)

以上の所説と左の聖<sup>セント</sup>ペシルの説とを比較するは面白き事ならん、恐怖の以て一層淺薄なる種類の人民を救ふべし、蓋し審判者の往々苦痛を



之に相當する者に蒙らしむと雖も、一層深く物理を審査する者は罪人を改めしめんと欲する神徳の目的を洞觀して、善を爲すことを神に告白すべし——(De Sp. Sane. ch. 4) 又聖グレゴリーは犯罪を呑み盡すべき神の怒は毫も怒に非ざることを云へり、曰く「神の場合に於て其怒は罪人には怒と見え、又罪人は斯く名くと雖も、其實毫も怒とせざるに足らず、假令へ怒は神の公道に從ひ應報と稱する者に歸するも、神自身に實に怒に於て現はれざるあり」と——(In Psalmos i. p. 359) オリヂンの所説も畧ぼ之に等し、曰く「汝の神の怒を聽くとき此憤怒の神の情なりと信ず可らず、此憤怒の小兒を改化せんと欲するの謂のみ、故に神が實際怒りたるに非ざるも、汝を改化せん爲めに神は怒りたりと録され、又憤りたり」と稱せらるゝなり」と——(In Jer. Hom. xviii. 6.) 又古代の詩篇註解者は詩篇第七篇に於て言へらく「神の罪人を恐怖せしめ以て之を正し改めん

が爲め恰も怒に似たるものを以て復仇の日を待てり」と、聖ベシル(百二十頁)「シアンザスの聖グレゴリー(百十八頁)及クレメント(百七頁)も概して同様の説を述べたり、聖ヒレリイは詩篇第六十七篇三節及四節に於て國民の歡喜の原因は永遠の審判の希望より來ると言へり、斯る教義を了得せしめんが爲め誠に吾人をして左の如く想像せしめよ、我法教師長の一人が神の審判は凡人を恐怖せしむべきも識者は其眞の目的が罪の治療に在ることを知るべしと陳述せしことを、又眞に著名なる監督が永遠の火は罪人を潔白よするものありと斷言せしことを、又火の通説は之を以て唯一或は至要の刑罰の力と爲せども實に淺薄の説と謂ふべし、火は聖書に於る「生命(賽四〇五)清淨(太三〇三)贖罪(利十六〇廿七)變化(彼後三〇十)の元素にして決して苦痛の爲めに活火を保存することに非ず、而して俗説は聖書にもなき此後説を正しく撰用



して之を神火の審判の單獨なる目的と爲せり、吾人は聖書の教訓に従ふも自然の理に據るも共に勢力ある火の概念は仁慈の作因たるを知る、自然は火が生活の必要の状態なるを吾人に告ぐるなり、其使命は生活を支ふるに在り、其消滅する時も生活を清淨にするに在り、若し宇宙に蓄ふる火を消滅せば萬物皆消滅し一般に死狀を呈せん、最も著しきは營養作用に於て現はるゝ火と生活の關係なり、蓋し吾人は現に生活する爲め火を燃す、吾人の食物は燃料なり、吾人の身体は竈なり、吾人の營養は燃燒の作用なり、吾人の實に、手指の尖端まで燃へ居るなり、斯く生活と動作は爐邊に彙集し、吾人家を思ふときは先づ家内の竈を言ふ。

聖書の自然の教ふる所を斷乎として主張せり、夫れ聖書に於て絶えず火と連合せる凡ての生活の大原因を發見するの重要な事なり、火は表

號にして神の怒に非ず其現體なり、神が以西結に來るとき、自から現るゝ火(二〇四及廿七)火の如く見ゆる形象(八〇二)あり、基督の眼は火の焰なり、(黙一〇十四)又七の火燈は神の七の靈なり、同上四〇五一道の火の流は神の前に行き、其實座は火の焰にして其車輪は燃る火なり、(但七〇九至十)彼の眼は火の燈なり、(全上十及六)彼は火の垣なり、(亞二〇五)彼山に觸れば山煙を出す、(詩百四〇卅二)又神の使者は火焰なり、(詩百四〇四、來一〇七)是れ神火が責め且滅すことを拒否するに非ず、其意たる罪障を洗去るとは滅亡に非ずして上に説く所の火が救の爲めに燒盡す最後の結果なりと云ふに在り、之を逆説パラドクスと稱するも可なり、蓋し神若し愛なりとせば其火を燃すは愛に由らずして何ぞや、實に火は愛の焰に外ならず、故に吾人は下の語の必要を認むるなり、汝の神は燬盡す火なり、又汝の神は慈悲ある神なり、(申四〇廿四及卅一)故に神は火を以て全地



を焼滅すべし、是れ終に凡ての人をして神の名を呼しめん爲めなり、  
 一(番三〇八至九)意味充滿の言なり、以寶亞も亦神が燒盡す靈をもてシ  
 オンの娘等の汚を洗ふと吾人に告げたり、(四〇四)有味の言と謂つべし、  
 又曰く、神は火をもてよるづの人を刑せん——(賽六十六〇十六)救に來  
 る基督は、火をもて罪障を洗除する爲めに來る(馬三〇二)と。

又、火は實に屢々神の恩惠ある答辭の兆候なりし事を看よ、神がブツシ  
 ュに於てモーセに現はれしときは、火にてありき、神がギデオンよ答へ  
 たるは、火を以てせり、ダビドに答へたるも、火に依れり、(代上廿一〇廿六)  
 又彼がカルメルに於てエリジャに答へしや、火を以てせり、エリジャ自  
 から、火に於て神に登れり、故に神はエリジャを助くる爲め之に、火の馬  
 と車を送れり、聖詩作者が呼ぶ時に神は、火をもて答へたり、(詩十八〇六  
 至八)又イスラエル人は、火の柱に依りて荒野に導かれたり、神は、火に於

て其律法を與へたり、又聖靈の大なる賜物は、火に於て五旬節に降る。  
 以上の言は吾人を新約全書に導くべし、吾人は新約書に於て、火は審判  
 の如く雷に罪人の有する所に止まらずして、凡ての人の有するものた  
 る事を見るべし、又火は神の審判の如く未來のみにあらずして現世に  
 もあり、そは既に燃へ、即ち常に燃へ居るなり、其目的の苦痛よあらずし  
 て罪を洗ひ淨むるに在り、其證言は吾主自身の口唇より出つ、曰く、余は  
 地上に火を送る爲めに來れりと、此言たる實に余が求めて教へんとす  
 る萬事を傳ふるものなりと謂ふべし、蓋し彼が救世主として來りしや  
 確實なればなり、斯くの如く基督は火を以て、否既に燃へたる火を以て  
 救に來れり、彼は聖靈と火を以て洗禮を施す爲めに來れり、故に基督は  
 莊嚴なる語法通例誤解せられたる可九〇四十九を以て、凡ての人の鹽  
 を漬る如く火を以てせらるゝと教へたり、されば、火は各人の事業を試む



べきものなり事を誤る者は救はれ救と云ふ字に注意せよ。恰も火に依て罰せられず、蓋し神の火は悪しきものを燬盡して救ひ且改むるものなればなり、古昔の傳説は基督を以て「余に近き者は火に近し」と言ふものなりとし、頗る生活の眞理を顯はせり、既に引用せる馬拉基も基督を其救済の業に於て「製煉者の火の如し」と録せり、又申四〇廿四至卅一を見れば左の如く記せり、「我儕の神は燬盡す火なり、即ち神は吾人に最も密接の關係を有せり、神は愛なり、神は靈なり、然れども、我儕の神は燬盡す火なり、即ち燬盡す火に依りて、罪の實質は全く滅亡さるゝなり」と、次に詩十八〇十二至三に於て「燃へたる炭、神の前より降り來れるを讀むときは我儕の仇に、熱炭を與ふる愛の行爲を思ふなり、(羅十二〇二十)故に吾人万民に希望を教ふる者の此神秘なる地獄の「火」を其最も十分なる意味に於て承認するを憚からざるなり、而して此火は基督が(罪の

洗淨の爲めに燃されて)特別の意義に於て未來の罪人の處刑なりと説きたるものなり、然れども最も明瞭なる聖書の所説を學べば(此等の所説は數多類似の性質ありと定めて)此等の火に於て希望に悖るものあるとなく、只希望を滿す法あるを見るべし、看よ、余は万物を新造す」上説を維持せんが爲め諸教父より許多の引證を擧ぐべし、聖、アムプロセントーズは詩一に於て云へらく、樂園の門に在る火の劍は、此處に歸る者が火に依て歸る事を示す者なりと、オリヂン曰く、身体の疾病が或嫌ふべき藥材若くは實際の腐蝕法を要する如く、我儕の醫師たる神が此種の刑罰法、將た火の刑罰をも治療の爲に用ふべきは敢て解し難き事にあらず、神の復仇の怒は靈魂を清洗するに利あり、所謂火に依て適用せらるゝ刑罰が治療の目的を以て適用せらるゝ事の賽四〇四に於て教へらるゝと、(De prin. ii. c. 6.) 聖、セローム曰く「火は十種族、異教徒及凡ての罪



人に用ふる最後の醫藥なき、神が死と滅亡を試み其時に至るも尙ほ悔改せざるべき、神のソドム及ゴモラに於る如く彼等を燬盡すべし、之を燬盡して神火が彼等の最悪なる物を悉く燒盡せしとき、火中より取出したる燃木の如く彼等は自から赦るざるべし、ならん。——(In Anosiv. II.)

「故に即ち治療を行ふ爲めに惡人の居る世界は審判の日に神火をもて燒かれ、血に染みたる市街は火の炭の上に置かるべし」——(In Ezech. xxiv.)

數多の教父が引用したる賽四十七〇十四及五を看よ、七十子譯を看るに此處に著しき一節あり、汝は炭火を有し其上に坐す、炭火は汝の助たらん也。

「彼等が火に於て死し、或は彼等の君主惡魔の火に於て滅亡せられ、或は神が余は全地に火を送る爲めに來れり」と言ひし所の火に於て燒かれ、(斯くして)其以前の途より引戻されて悔改するに至れば、全地は神の榮光をもて充滿せらるべし」——(In Heb. ii. 12. 實に聖セロームに此教義よ)

富めり例へば馬三〇二至三、何四〇十三、耳二〇一、鹿七〇四等に於て其論する所を看るべし、靈魂の罰を受けし後終に外層の暗黒より顯はれ、最後の負債を拂ふて始めて言はん、余は神の公義を看ると、而して神の怒を受たる後に神の公義赦罪を見ると言ふ者は、自から基督の現出を希望するものなり」と——(In Micah vii. 8.) 又古代の註解者は(聖セローム)神を説て曰く、彼は惡魔の寒冷を逐ひ斥くべき火なり」と——(In Ps. cix vii. 18. 之よ等しき諸説はニサの聖グレゴリーより引證するを得べし、惡人は、清洗すべき火に依て靈魂に混在せる汚垢を除去するに非ずんば死後神性の享有者と爲るを得ざるべしと)——(Orat. de mort. ii. p. 1067.)

「故に罪に結合せる靈魂は火にて燒かれざる可らず、是れ悖逆鄙陋なるものを永遠の火にて燒盡し除去せんが爲めなり」——(De an. et Res. ii. p. 658.) 永遠の火は罪を洗ひ淨むるなり。



尙ほ吾人の思考すべき甚だ緊要なる種類の事件あり、是れ誤て世俗の信條を助くと想像せられたるものなり、此事件とは選民と其數の少なきことを説くものにして、招呼せられたる者は多數なれども選定せられたる者は少數なりと云ふ事是れなり、神の撰擇は聖書に於て明示せられたる一教理にして、此事は不幸にも區々たる爭論を惹起せしと雖も公平なる讀者の毫も疑を容れざる所なり、或黨派は眞實なる神の撰擇を確定するに當り虚妄にも神を獨裁殘忍の暴君たらしむる如く斷言せり、然れども耶蘇基督今余の信する祖宗に於てに依りて恩恵を顯はす神の計策に就き一層眞正一層深奥なる説は神の「少數」を選みたる教理を明に斷定せんことを吾人に教ふ、而して吾人が斯の如く斷定する所以は普及慈惠の目的を之と結合せん爲めなり、神の撰擇の眞正の目的と意義とは如何、吾人々に答へて曰く選民の管に彼等自身の爲めに

選まるゝのみならず又他人の爲めに選まるゝなり、彼等の管に恵まるゝ爲めに選まるゝのみならず又惠の根原たる爲めに選まるゝなり、神の選定は多數の死するに際し少數を救ふと云ふ卑劣の目的に非ずして萬民に慈惠を垂るゝの目的なり、少數に依て多數を救ふなり、選民は依て世界を救ふなり、ドクトル、ゴツクス曰く、汝若し之を聖書に求めば此不易の教義を發見すべし、古代に於て一人、一家族、一國民が神の眞理の貯藏所たる爲めに相續て選舉せられし時も、是に依り吾人が狹隘限局の境界内に現はされたる神の贖ひの目的を發見せんと期望せし時も、又疑なく一身の約束と國民及現世の制度とに依りて大に束縛禁止せられし時も、神の目的は永く各個の境界、虚浮の限定及禁止を超越して、總て今ある靈魂又後よあるべき靈魂を以て、悉く其適當なる配分者なりと希望したるなり、*Salvat. Mund.*之を證すると容易なり、今神の選



擇の眞意を示さん爲め一の模範を求め、初の選民の父にして創立者たるアブラハムの例を擧げ、彼に對する約束は如何地の諸族は彼の裔に由て福を獲んと、是れ神の選擇の本旨なり、聖、ポールは完全明白に此事を説きたり、具眼の讀者は知るならん、神の威權を最も尊重し宇宙の調和を最も明に教へたるは正に此使徒なることを、聖、ポール吾人に告て曰くアブラハムに對する約束は彼に世界の嗣子たるを得させんこと、是れなりと、(羅四〇十三)此言たる最も明白にして而も普通の選民説と異なれり、別語之を言へば神の選民たる猶太人は凡ての土地と凡ての人民を其遺物と爲せり、同じく羅馬書に於て聖、ポールはイスラエルと世界との關係の親密なるを指示せり、彼は三回以上も彼等の眞の零落は世界の幸福なりと説き、又若し然らば世界は對しイスラエルの調和にあらざる者は何ぞやと問へり、要するは人類の運命は神の選民の上

に懸れり、(加三〇八、徒三〇廿一及五を看よ)就中後節は甚だ趣味あり、蓋し聖、ペテロは此處に於て普及救済とアブラハムに對する契約即ち其選定の關係を説き、之を就き更に感嘆すべき説明に其、初果及長子に於る教訓より出づ、(聖書之を教ふ)神の選民たるイスラエルは、初果なり、長子なり、然れども、初果は全果實を包括し、長子は神の經綸に於て全家族を包含せり、是に由り、イスラエルは皆救はるべしとの約束は世界の救済を包含するなり、長子と初果は其數僅少なり、然れども此等は最初苦難を免れたりと雖も、初生子即ち基督及其肉躰に依りて指定の時期に救はるべき全躰の万物に關係を有せり——(ジュークス氏)されば吾人は少數の選定を拒否せざるのみならず却て之を神が萬民に慈悲を與ふるの方案に緊要なりと尊重する所以は明白なり、是れ恰も世界の救済の建物に於る一隅の石の如し、蓋し神の選擇は吾人の父が悉



く其子を恵まんと欲し又其普及救済の計畫を顯はさんと欲する一手段たるに過ぎざればなり、神が統治する威權は永遠の愛なり」—P. STERNY, *Rise, Race, &c.*「神は王なり全地は悦ぶべし」—(詩九十七〇一)

終りに臨み實に此等の疑問を決定する原理を示さん爲め茲に數言を述べざる可らず、其原理は最要根本たるものとして即ち神の唯一に外ならず、第一の信條、余ハ全能の父なる唯一の神を信すに外ならず、蓋し神は實に性質のみならず目的と意志とに於ても唯一にして不變なるものなり、然れども世俗の信條は吾人ヲ示す此神を以てせずして温和と怒の間に彷徨する者を以てし、又常に變動する計畫と支離錯亂せる意志を有する一物躰を以てせり。

\* 具眼の讀者は不變の神が嚴密に確定したる憤怒の極めて之に相違せる所以を考ふべし。

彼の創造物の半部に對しては實ニ瞬間にして彼の復仇は無限なり、又他の半部に對しては彼の憐憫は無限にして彼の怒は暫時なり、吾人の説きたる神は其子耶穌基督に現はれたる神に非ずして全く之に異なりしシバとビシユニウを奇怪に混交したる者なり」(F. D. MAURICE) 此神は彼の自家の神にもあらず、何となれば彼の創造物中最惡最弱なる者が終に彼の最愛の計畫を破壊し基督の十字架を麻痺せしむるを得ればなり、以上述ぶる所の神に就ては全能不變にして其性質常に慈悲を有し、其愛永遠に亘り決して衰へざる故に常に罪を罰するも絶えず罪人を助けんとするが如き神を見る能はず。此章は世の神を誤解する者に對して斯く特別の反對を爲せり、蓋し俗説に據れば永遠の愛を以て罪人の死をるや否や憎惡に變するものと爲し、無益にも永遠の父を説て其審判は一世界に於て救済を計るも次の世界に於て刑罰に變す



るものと爲し、又永遠の愛を以て其父は現世に於て汚垢を清洗するも墳墓に入る後は單に(目的なき)苦難に變するものと爲せり。斯かる教義を唱道して不信仰の充滿するに至らば、豈に驚かざる可んや。

茲に「死」審判、「火」選擇に就て述べたる説は此反對論に對抗するものなり。古代の眞理は以前よりも一層堅固なる基礎を保ち最早爭論するに及ばざるべし、何となれば眞理の終に神の單一即ち本質の單一及目的の單一に歸すればなり。神の本質の單一は吾人が彼に反對の行爲を指定するときには破壊せらるべし、是れ恰も彼の愛は行爲の一路を要し彼の正義の他路を求むるが如し、又救主なる神は一個の者にして審判者なる神は全く異なりたる者たるが如し、或は又吾人は盲目も、若し神の審判が當時救済の意義を有せば、大なる日に於て無限の苦難の意義を有すべしと教へん乎、余は重ねて曰はん神は其審判に於ても、其火に

於ても、死に於ても、選擇に於ても、現世に於ても、永遠に於ても、唯一同種の神にして(來十三〇八)永遠に亘り唯一不變の目的を有し又有せざる可らず、即ち永く我儕の救主たる神なり、又救主たる神たらざる可らず、神の單一なるは單に虚形の問題にあらずして神の本質と品性を現はし、數の法則は基かずして靈と意志の法則に基けり、撒加利亞は「神は全地の王なるべし」と言ひしとき之に附加して曰く「其日は於て神は唯一なるべく又神の名は唯一なるべし」と、聖、ポールは神は萬民を救ふべしと説くに當り、之を神の愛に歸せずして神の單一に歸せり、蓋し唯一の神は萬物の主にして終に其創造物を曾て之を發出したる所の單一に全く引戻すべければなり、其他聖、ポールは福音書に於る神の制限なく變更なき約束を律法と比較し此神の單一に語勢を加へ「則ち神は一人なり」と言へり(加三〇二十 See LIGHTFOOT in loco) ニサの聖、グレゴリー、曰



く神の行爲を愛と嚴刻とに分つは只狂氣否、空談家の狂心のみ、氏は神が實に其敵に對する殘酷にして(路六〇廿七の註第八章を看よ)其友に對するに親愛を以てするとの空想を蔑視し(氏の論に於て最も異常あり)絶叫して曰く、オ、此等空談家の狂氣よ、神若し其敵よ對して殘忍ならば其友なる汝に對しても眞に親切ならざるべし」と——(De creat. I.)

### 第七章 舊約全書の教説

「此宏大にして遠達する約束、即ち福音のアブラハムに與へられし時より神の救の一般の目的を主張すると次第に旺盛を爲り、希伯來聖書の中にも亦之を脱きたり、是れ吾人が屢々唯地方的及國民的精神より鼓舞せらるるを假定するものなり」——(Salvator Mundi.)

「世界の全歴史は斷へず神の救の方畧を以て貫通せらる、其第一の目的は神の人民なり、即ち其目的は彼等の中に在り、彼等と共に在り、又人類全体に在り」——(詩卅三〇十一に於るテリッツの説)

余は教會の次に舊約全書に眼を轉すべし、余は只其教義の概略を述べんとするに過ぎずと雖も、吾人は恐らく數多の讀者に對し一層大なる希望の意外の證據を夥しく發見するならん、實に舊約書に於る約束は重きに現世的なりと云ふも可なれども、吾人は尙ほ仁慈の方畧該書中



に現はれて萬民を包括すべき確證を有せり、蓋し舊書の神詞の解釋は  
 常に推測上に止まる可らず、乞ふ吾人をして一證人を呼出さしめよ、是  
 れ即ち聖<sup>セント</sup>ペテロに外ならず、此使徒は其最初の一演説に於て(徒三〇廿  
 一)耶蘇基督に於る神の眞の目的を解明すべき機會を與へたり曰く終  
 に「萬物復興」の時來らんと、彼は之に有味の語を附して曰く、神は古より  
 聖預言者の口に託て之を言たまへりと、故又吾人此希望を教ふる者は  
 凡て神の聖預言者の方針に従ふのみ、さればペテロは吾人をして舊約  
 書を研究して、恰も其種々の預言を一の符合せる全躰に組織し、終に一  
 聲に「萬物の復興」を呼ばしめんと欲せしならん。

余は既に創造の福音を述べたるを以て、此處に於ては神の肖像を人に  
 印したる神工に就き吾人が福音の萌芽を有する事を記すれば足れり、  
 故又創世紀の初章は神の愛する權威、人類の運命及神性の起源に就き

最大の見解を吾人に與ふるものなり、——ウエストコット氏父の默示聖書  
 の一致の中心は人類の神より來り神に歸るとの大事實(即ち羅十一〇  
 卅六)と、此歸復を安全よすべき神の方略とに在り、而して「多くの區分」と  
 「多くの方法」(來一〇二)は皆此中心に聚るものなり。

故に吾人は猶太の制法の眞意を知る、即ち、其事業は人類の爲めなり、猶  
 太教の觀念はシナイに於る契約に在らずしてアブラハムに於る約束  
 に在り——(全上)

舊約書中萬民に恩惠を與ふる約束は殆んど到る處に之を索むるを得  
 べしと雖も、今茲よ之を精細に思考するの餘暇なし、墮落の時に於て與  
 へられたる一の約束の完全の滅亡を暗示して蛇頭打碎かるべしと云  
 ふに在り。

茲に余は未來刑罰の極端説を持つる者も、アダムとイブが慈悲を見出せし



この信仰に一致するが如きを見るべし、然れども若し然りせば左の如く問ふも可なり、曰く墮落<sup>カ</sup>と總て其苦難の創造者たりし彼等は果して免るべきや、墮落性を有する數多の不隨意なる嗣子が罰に處せらるに拘はらず、正しく創造せられたる彼等は墮落することも終に慈悲を見出すべきや。

茲に甚ぶ有味なる二點あり、此約束は蛇の創傷のみにあらずして其滅亡を包含する所の創傷なり、又次に此約束は恐るべき審判と密接の關係を以て傳へらる、是れ宣告の一部なり、是れ恰も其中に包含せられたるが如し、吾人は更又人類に對する福祉の暗示がアブラハムに對する約束と混合せしを知る、而して此至大なる福祉の暗示の屢々指示せらるゝや默示の川流の注くが如く益々發達せり、吾人は律法、詩篇及預言者の中に普及福祉の分明なる痕跡あるを知る、故に律法の教訓中基礎たる部分は「初果」と「長子」の規定に在り、此至極の意味は該書中處々よ於

て一層大なる希望を負ひ、又耶穌基督に於て完了せらるゝとして示されたり、<sup>カ</sup>「初果」が全果實を擔保し長子が全家族を擔保するが如く、選民即ち神は長子(イスマエル)我子なり我長子なりは「万民皆神の子なり、萬民皆神の恩恵を享有すべき運命あり」と云ふことを擔保するものなり、猶太人の傳説は正しき見解を下せば之を證明するものなり、彼等は「初果」として全人類に福祉を與ふる溝渠なり、是を以て吾人はアブラハムに反復せる約束を有し、又地上の諸族は彼の苗裔に於て福を得ん、故に猶太の族長が使徒の著しき語に於て「世界の嗣子」と爲りしも敢て不可なし、此原理即ち選民が總て爾餘の者に對し幸福の一手段と爲る事は、猶太の律法に於て特に確定せられたり、一束の初穂は全收穫の擔保として潔めて神に捧ぐべし、(利廿三〇十至十一)凡て牛羊の初子は皆神の所有たる擔保として神に歸せしむべし、(申十五〇十九)彼等の「長子」ハ斯の



如くありたり(出廿二〇廿九)今若し眼を新約書に轉せば吾人は基督の王國に於て總て之に關する緊要の目的を學ぶべし、先づ使徒は吾人に保證して曰く、若し「薦新のパン」きよからば凡ての「パン」も亦潔しと(羅十<sup>一〇</sup>十六)次に説て曰く獨りイスラエル人のみならず基督も亦高尚なる意味に於て「初果なりと(哥前十五〇廿三)而して前後の文勢はアダムが万民に死を與へし如く、基督が万民に生命を傳へ且實に分與する事を含めり。又イスラエル人が「初子」たりし如く(出四〇廿二)高尚なる意義を以てすれば基督も亦各創造物の先に生れし者なり(西一〇十五至廿)(哥前十一〇三)にて凡の人の首と云へり此處に於ても亦前後の文勢は基督なる「初子」に依りて凡ての人の神に和合するを含めり、斯く吾人は二様の「初子」を有せり、即ち眞正の「初子」なる基督と、「初子」の一種なる彼の人民(ジエームス一〇十八)是れなり、基督は「初生子」(西一〇十八)にし

て又其人民(彼の選民)の「初子」の教會(來十二〇廿三)なり、總て此事が律法に於て豫表せられたるの甚だ驚くべきなり、蓋し其中に二様の「初子」を言へり、一は除酵節パスカッタと基督の復活したる其日と、安息日の翌日——(利廿三〇十及十一)とに捧けられし者にして、他も亦別名を以て區分せらるゝも、明も初果と名けられ五日の後ペンテコストに於て捧けられしものなり、尙ほ詳細に知らんと欲せばジエークス氏万物の復興論卅五及卅七頁を看よ、斯く律法にも普く萬民よ及ぼすべき福祉の暗告を含めり。

是より聖詩の作者に移りて萬物復興の約束を討究せん、蓋し作詩家も亦神の預言者にして最大の先見に富めばなり、彼等は未來の救主を説くに當り、特に自身の爲めに其治世の福祉を請求せずして、下の如く言へり、彼の名は常に絶えず、彼の名は日の久しき如くに絶ることなし、人



は彼よりて福祉を得ん、もろくの國彼をさいはひなる者どゝなへん云々、彼等の常に願望の聲を發し、もろくの國よ、なんぢらエホバを讃まつれ、もろくの民よ、なんぢらエホバを稱へまつれ」と言へり——  
*Salvo. Mundi.* 其他凡ての國民と凡ての人民に對し、彼等をして神の讚美よ加はらしめ、又彼等が他日斯く爲すべきことを正に豫察したる類例は、聖詩に於て屢々見る所なり、例へば吾人の祈禱書に於て人の熟知する *Cantate Domino.* (詩九十八) を舉ん、其中に於て神よ向ひ自から歡を現はすべしと、全地に告げたり、吾人の習熟せる (詩百) *Jubilate* の句、全地よ、エホバにむかひて歡べしき聲をあげよ、亦同一の意義なり、此觀念が作詩家に潜伏したる深淺如何を示さんが爲め、茲に數言を附加せん、もろもの國よ、なんぢらエホバを讃まつれ—— (詩百十七〇) 諸人こそりて汝に來らん—— (詩六十五〇) 汝もろくの國を嗣たまふべし—— (詩

八十二〇) 八もろくの國は汝の前に來りて伏拜まん—— (詩八十六〇) 九「全地はなんぢを伏拜まん」—— (詩六十六〇) 四「全地よ、エホバにむかひて謳ふべし」—— (詩九十六〇) 又下の如く言へり、もろくの國はかれにつかへん云々、凡の異教徒は彼を讃まつらん、全地はその榮光にて滿べし—— (詩七十二〇) 十一及十九、よろづの民は世々かぎりなくそのきよき名をほめまつるべし—— (詩百四十五〇) 廿一又云く、地の王たちもろくの民みなエホバを讚稱へよ—— (詩百四十八〇) 十一「その造りたまへる萬物よ、エホバを讃まつれ」—— (詩百三〇) 廿二「もろくの民はみな汝をほめたたへん」—— (詩六十七〇) 三及五「地のもろくの極ことごとく神をれそれん」—— (全上七) 地のはては皆おもひいだしてエホバよ歸り、もろくの國の族はみな前にふしをがむべし—— (詩廿二〇) 廿七。此引證は贖罪と此詩の親密なる關係の爲め、特別の意義を有し、其結



果として地のはては皆其預言の如くエホバに歸すべし、是れ總て基督の王國の完全なる一統の爲めに著しき一列の證據を組成するや疑なし、公平の心を有する者は豈に口碑的信條を以て此等の所説の満足なる解明と認むるを得んや、世人は神の目的の範圍を狭め其分量を縮むるを好むと雖も、凡て無數なる種族中未生者のみ實に全く神を知るを學ぶべしと云ふときは、此等の範圍廣大なる約束は果して明に照應すべき歟、斯く考ふるは爲し難き事なり、万物復興の時は、若し聖書に於て眞よ之を説くとせば、正に來るべき筈なれども、茲に其前兆を見んとするは爲し難き事なり、獨りイスラエル人のみならず万国否如何なる存在物をも誘導したる作詩家の眞精神は此普及の希望に於て發見せらるべし、看よ作詩家は終りよ臨みしとき、勝利の聲次第に高く且大と爲り、最廣なる普及福祉の先見に擴張せしに非ずや、(詩百四十八及百五十)

此精神を以て結んで曰く、氣息あるものは皆エホバをほめたへよと

(詩百五十〇六)

一層大なる預言者の所説も實に同一なり、但し余の之を精細に述ぶるを要せず、其種々の所説中より屢々最廣最大なる希望の約束發出し、普及の福祉及歡喜の時機の先見發出し、凡て苦痛悲哀の過去るべき世界の先見發出せり、然れども此等の説は大抵世人の熟知する所なれば茲に之を引用するに及ばざるべし、此等は基督教徒の心裏に侵入し自から其文字上に傳へられたり、然れども福音的預言者より唯一章を抜載せん、而して主として之を抜載する所以は、<sup>セント</sup>ポール之を復説し且復説の際之を解釋したればなり、エホバ以賽亞の口より依り左の言を述べたり、曰く、地の極なるもろくの人も、汝等我を仰き望め、然ば救はれん、我の神にして他に神なければなり、我は己をさして誓ひたり、この言は正



しき口より出てたれば反ることなし、凡ての膝は我前に屈み、凡ての舌は我に誓をたてんと、神の目的は全地の極端まで救ふに在り、凡ての膝、神の前に屈みて忠義を表するに在り、凡ての舌、神に忠義の誓を立るに在りと云ふ事は如何なる言語を以てするも之に優りたる陳述を爲し得ざるべし、吾人は明に此言は神の正しき口より出てたれば空しく反ることなし、然れども其目的即ち人類の救済は完成せざる可らずと云ふ事を聞きしに非ずや、聖、ポールは此至言を復説し、羅十四〇十一、腓立比人に贈りたる書に於ても亦之を説きたり、但し彼の所説は寧ろ確定精密を加ふるも断じて分厘も其本意を失はず、彼の説明、腓二〇九及十一に曰く是故、神は甚しく彼を崇て諸の名に超る名を之に予へ給へり、此は凡ての人の膝のみならず、今や約束の廣大と爲りしこと測る可らず、天に在る者、地に在る者及び地の下に在る者をして悉くイエスの

名に由て膝を屈しめ、且もろくの舌をして悉くイエス、キリストは主なりと稱揚して父なる神に榮を歸せしめん爲めなり」と、以賽亞の言を以て普及救済を謂ふに非ずとするは解し難き事なり、然れども若し聖、パールの言を以て廣大なる普及救済を謂ふの意にあらずとせば其言に何等の功益あらんや何等の勢力あらんや』——(Salvator Mundi.)

余は簡短に下の一節を説かざる可らず、彼は己が魂の煩勞を見て心たらはん。——(賽五十三〇十一)無望無限の害悪は如何なる妙案を以て此等の語と調和す可きか、余をして基督は自己の兒穉が無限の零落に陥るも尙ほ満足せりと信せしむる所の信條は焉んぞ之を受容するを得んや、誰か耶蘇基督に就き之を信せんや、誰か彼は人間の爲め、死しながら人間の靈魂の最終至極の零落を見て、満足し、其十字架の失敗するを見て、満足し、孤獨の場合に於けると等しく害悪の勝利を見て、満足す



べしと信するを得んや。

又豫言と聖詩が極めて廣大なる神の憐憫と常に衰へざる神の慈愛との描寫に富めるところを記憶すべし、吾人の哀歌の中よりも、主は永久に棄ることを爲たまはざるべし、彼は患難を與へたまふと雖もその慈悲大なればまゝ憐憫を加へたまふなり——(哀三〇卅一)と吾人に保證する聲を聽く。又下の語を看よ、われ限なくは争はじ、我た怒らずは怒らじ、然らずば人の心我前に衰へん、我造りたる靈は皆然らん——(塞五十七〇十六)此觀念は甚だ良好にして神の怒の長く續かざること、神の愛の限なく續くことを對照せり、わが忿恚あふれて暫くわが面を汝に隠したれど、永遠のめぐみをもて汝をあはれさんと、こは汝を贖ひたまふエホバの聖言なり——(賽五十四〇八)神の怒に期限ある事は舊約書の明に教示する所なれば、今吾人は少しく此事實の意義を説かん、先づ下の數

例を看よ、エホバいひたまふ、われは矜恤ある者なり、怒を限なく含みたることあらじ——(耶三〇十三)その怒はたゞしばしなり——(詩卅〇五)その憐憫は永久に絶ることなければなり——(詩百卅六)此一篇の詩に廿六回以上反復したる言なり、恒にせむることをせず、永遠に怒を懷きたまはざるなり——(詩百三〇九)神は憐憫を悦ぶが故にその震怒を永く保ちたまはず——(米七〇十八)若し以上の言を以て眞正なりとせば、世俗の信條の果して如何、若し神の怒を以て暫時なりとせば、焉ぞ無限なりと言ふを得んや、若し神の怒たゞ暫時に過ぎずとせば、孤獨の場合も於ても永遠に續くべしと言ふ可んや、吾人の反對論者は此等の明白にして反覆陳述せる定説に對するに宜しく公平を以てすべし、又何故に神の怒と屢々永く續くべく、神の憐憫は永く續かざるべしと教ふるを以て正當なりと爲すか、乞ふ其理由を説明せよ。



余は今但以理書中の二節に注意を乞はんとす、一節に於ては(七〇十四)全く統一の權を人の子に約束せり、其言たる次章に引用する數節と對照せるも皆同一の趣意なり、又一節に於ては(九〇廿四)約束は惡を抑へ罪を封すべき命令より成れり。

吾人は普及の福祉が大なる豫言者の書中に描出せられたることを説きたり、既に引用せる記者の言へることあり、曰く恐らく汝等の中にて此同一の描寫が小豫言者にも存すること、甚だ味ふべき事實、又此等の短詩或の詩集に皆各々其些少の默示あることを等しく熟知せざる者あらん、宜しく此點に注目せよ、小預言者が各々正義の愛と勤勞とに對して救はるゝ所の全世界の現像を見るに當り、此救の現像は常に審判の現像に伴ひるゝなり——(第六章審判を看よ)假令へ悉く然らずとするも少くも小豫言者の多數は普及救済の時期の來るを預言せり、何西

阿書十三〇十四に曰く「死よなんぢの疫は何處に在るか、陰府よなんぢの災は何處に在るか」——(哥前十五〇五十五參看)約耳書二〇廿八に曰く、吾靈を一切の人よ注がんと、哈巴谷は審判の恐るべきを洞觀し「エホバの榮光を認むるの知識地上に充て宛然海を水の掩ふが如くならん」と言へり。——(二〇十四)是れ實に驚くべき事よ、あらずや、基督教が纔に此世に生れし時に當り聖、ペテロは奮て其光榮ある目的及綱領として普及の復興人類の爲めに恢復せる神の樂園——万物復興(徒三〇廿二)を宣言せしが汝は彼の語に同意を表するを得ざるか。

然れども余は更に述ぶる所あらん、吾人は西番雅書に於て同一の榮光ある預想、同一の普及の希望を見るへし、彼は「諸の國の民各々その處より出てエホバを拜まん」(番二〇十一)爲めに國民に對ひて神の審判を畏るしきものと説きたり、又同預言中に神が人を清むる爲めに其烈き審



判を爲す所以を説きたり、曰く、彼等をして凡てエホバの名を呼しめ心を合せて之に仕へしめんと、(三〇九)馬拉基は實に審判——製煉の火——の告示を以て預言を結びしが亦之と共に期望を顯はせり、日の出る處より没る處までの列國の中に神の名は大ならん、又何處にても香と潔き献物を彼に献げんと、——(一〇十一)此期望を導く語、日の出る處より没る處までは撒加利亞十四〇七の優美なる一句、夕暮の頃に明くなるべしを想起さしむ。

以上の觀察は甚だ簡短なりしと雖も、普及希望の主義が舊約書を貫通する所以、即ちイスラエルの作詩家、預言者及律法が未來を預想して罪既に滅び悲歎永く去るべしと爲せし所以を示すに足らんと余は信するなり、新約全書に就ては必要の存する所あるを以て、次章に於て一層精細に之を討究せんと欲す。

## 第八章 新約全書の教説

「余は茲に簡短に言ふべし、余自身の心を以て看るに、新約全書の言語ハ疑なく、万民の救はるゝと、万民が吾人の今沈淪せる不幸及苦痛の状態より實に救出さるゝこと、万民が完全なる生活に實に高めらるゝことを斷定するが如し。余の心を以て見るに、此普及の主義は明に聖書に示されたるが如し。」(ヒントン氏苦痛の玄妙説)

吾人は今新約全書に於て万民の救済を明言し或は其意を含みたる數多の章句を檢査せん、吾人の此等の章句の夥しく存するを見るならん、今や一層大なる希望の爲めに滿腔の勇を鼓して新約全書の文字と精神とを等しく辨明すべき時機來れり、唯余の望む一事は普通の公平と正直とを以て我、儕の主と其福音宣傳者及使徒の言ふ所の意義を了解せんこと是れなり、其例數多あれども其中より少許の例を左に擧ぐんと



す、即ち彼等が凡ての人を説く時は、則ち凡ての人を指すものにして、或二三の人を指すに非ずと余は假定するなり。彼等が万物を説く時は、即ち万物を指すものなりと余は假定するなり。彼等が生命と救を世界に與ふと説く時は、則ち之を與ふるの義にして、單に之を口に唱ふるのみにあらずと余は假定するなり。彼等が悪魔と悪魔の事業と死の滅亡を説く時は、則ち此等が滅亡せられて永く地獄に保存せられざるを示すものなりと余は假定するなり。彼等が万物の全部苦痛に沈めりと雖も救はるべしと告る時は、則ち凡ての受造物の實に救はるゝの義なりと余は假定するなり。彼等が救出は墮落よりも更に廣大にして勢力ありと告る時は、則ち少くも墮落より起りたる害惡の悉く除去せらるべきことを吾人に告るの意なりと余は假定するなり。彼等が基督の帝國は萬事萬物の上に擴張せらるると記し又凡ての舌は彼に忠義を以て従はざる可らずと告る時は、則ち此等の語は其通常の意義を以て傳へらるゝものなりと余は假定するなり。若し然らずんば余は實に神を虚言者と爲すものにあらずや。

口碑的信條は何を要するや、此信條は實際に於て支離分裂せる聖書を要し、而して更に之よりも太甚だし、此信條は吾人をして聖書中最も高尚にして神妙なる者を塗抹せしむ、余は神の威嚇を拒否すべき希望を有せず(次章を看よ)此等は當に充分承認すべきものなり、然れども聖書の至要なる目的は、我儕の父なる神の名を顯はまに在り、又神の充分なる勝利を告げ萬惡の消滅して地獄に永存せざるを示すに在り、此事を忘却する教師は聖書を誤讀する者なりと余は主張すべし、聖書中に在る「悉皆」は或害惡を預言する時に全く「悉皆」を指し、最終の救を説く時のみ、若干「若干」を指すてふ教義は余の反對する所なり、此最も不公平



なる解釋法は深く人心に感染して殆んど自から之を覺らざるに至れり、吾人の聞く所に據れば、萬物の復興とは唯或者のみ回復せられて、或者は永く苦難を受け、又滅亡せらるゝの義なり、神と終に萬物の主たるべしと云ふの神が多數の者を永く無限の害惡に沈淪せしめ、永く己れを誘ひ嫌はしめ、唯爾余の者を救ふの義なり、又神の慈悲の總て其事業を掩へりと云ふは、通常の信條に據れば、其憐憫地獄の門に於て斷絶せるの義なりと、斯の如く教へながら翻て吾人を責むるに聖書の語を忌避すると云ふを以てする者あり、吾人より之を見れば此問題たる嚴肅なるも殆んど失笑すべきものあり。

註解書の全史に含有する奇異なる事實は新約全書の大部を明知せざる執拗に過ぐるはなし、どの説は余の服従する所なり、之を明示せんが爲め、人類或は恐らく寧ろ全宇宙と共に擴張する救の國を基督に請求

しつゝ、明白親密に連合する所の一大連鎖より次の句節を掲載すべし、而して其句節は各々同一の中心たる觀念を告示し、或は之を含有し、以て一連鎖中の一環を成す故に明に此關係を認むべし。此連鎖は萬物の基督に依て創造せられし時より始まるものなり、故に基督は聖ポールの言へる如く萬物を神に調和すべし、(實に再造す)——(哥前一〇十六及廿)是に由り基督の事業は萬物の復興に在り、(徒三〇廿)基督は萬物の嗣子なり、(來一〇二)諸國の民は彼に由て福を獲ん、(加三〇八)是れ父彼に賜し所の者に永生を予んがため、凡ての者を制する權威を彼に賜ひたればなり、(約十七〇二)原文を看よ、人々皆神の救を見ることを得ん、(路三〇六)神旨は易らず、(來六〇十七)彼の仇に對する状態は不變の愛なり、(路六〇廿七及卅五)萬人救を受るに至るべし、(提前二〇四)衆人の悔改に至ること、(彼後三〇九)神は衆人を憐まんが爲に威之を不服の中に入か



こめり、羅十一〇卅二萬物は彼より出で彼に歸る、羅十六〇卅六故に彼の一切の物を基督の足下に置く、(弗一〇廿二)又吾人と神が萬物を基督に歸せしむべきことを證せらる、(弗一〇十)生命を獲ることも凡ての人に及べり、(羅五〇十八)耶蘇己の手に父の萬物を賜ひしことを知り、(約十三〇三)彼の十字架に依り萬民を引て彼に就せんことを約束せり、(約十二〇卅二)父より萬物を受けたり、(約三〇卅五)凡て父の彼も賜し者は彼に來らん、(又彼は一をも失はず、(約六〇卅七及九)若し其一を失はば其失し者を獲まで尋ざらんや、(路十五〇四)故に萬物を新にせん、(黙廿一〇五)斯く基督の來りしは凡ての人をして信せしめん爲めなり、(約一〇十七)彼に由て世を救はん爲めなり、(約三〇十七)神の恩の凡ての人に救を賜ふ、(多二〇十二)神は世の罪を任ふ、(約一〇廿九)世の生命の爲めは彼の肉を賜ふ、(約六〇五十一)その神の賜と召は易ることなきに因る、(羅十一〇

廿九)彼は生命を世に賜ふ、(約六〇三十三)世の光なり、(約八〇十二)偏く世の罪の挽回の祭物なり、(約壹二〇二)万人の救主なり、(提前四〇十)悪魔の工を毀ち、(約壹三〇八)雷に然るのみならず悪魔をも滅ぼし、(來二〇十四)死を廢し、(提後一〇十)罪を除かん爲めに顯はれたり、(來九〇廿六)斯く萬物を己に服従せしむ、(腓三〇廿二)此前後の文勢は此服従を彼に適合すべきことを明示せり、死を忘れず陰府に福音を傳ふ、(彼前三〇十九)彼は其論を持てり、(黙一〇十八)蓋し彼は永遠變らざる、(救主なり、(來十三〇八)斯の如く福音の死し者にも宣傳へたり、(彼前四〇六)死と陰府とは破壊せらる、(黙廿〇十四)斯して彼に屬る衆の人は生べし、(哥前十五〇廿二)蓋し基督は其業を成し了り、(約十七〇四)全十九〇卅)萬物を復興し、(徒三〇廿二)而して重て呪詛あることなし、(黙廿二〇二及三)然れども天に在るの地に在るもの及び地の下にある者をして悉く膝を屈しむ、(腓二〇十)蓋



し受造者は敗壞の奴たることを脱れ(羅八〇廿二)凡て造られたる者皆共に讚美の歌を唱ふ(黙五〇十三)而して彼れ國を凡ての物の上に主たる神に付さん是れ終なり(哥前十五〇廿四及八)

余は重ねて言はん以上の句節は妄りに採り強ひて羅列したるものに非ず、此等は彼の聖書を貫通する目的、即ち始めに神に像りて人を造りしりと云ふ目的、又律法、聖詩及預言中に證迹を求めべく、殊に新約書に於て最も明ある目的を顯示するものなり、是に由て吾人は左の三件を學ぶべし、(一)基督の來りしは自から完全の人類たらんと望み、全体を救ひ復さん爲めにして、假令へ大なりとも、其碎片を救ひ復さん爲めに非ず、(二)彼は凡ての心、凡ての害惡、凡ての意志を制する、天地の諸力を受け、凡ての者を制する全權を有して來りしなり、(三)彼の生れて死し又甦りたるは、彼が明し望みし如く、最も充分なる意義に於て、彼の事業を完成

したる勝利を表するものなり。

故に基督の救の力は絶對普及にして凡て如何なる靈魂も又如何なる物をも包含すべし之を拒むは新約全書より其教義の至緊至要なる部分を除去するに外ならざるが如し、蓋し新約書の數多の句節に於て凡てなる文字之輕々しき意味を以て用ひたるものなりと謂ふ可らず、吾人は互に結合せる一連鎖を有し、其連鎖中基督の王國の普及する事の確實にして疑ふ可らざるは其中心たり本質たる思想なり、乞ふ今より吾人をして如何なる口碑的証説も迷ふとなく正當公平なる意味を以て新約書の句節を稍々詳細に講究せしめよ。

「それ人の子は亡たる者を救はん爲に來れり」(太十八〇十一)

茲に起る疑問は下の如きものゝ過ぎず、曰く耶蘇基督は其爲すために來りし事を實爲すべきや、又は失敗すべきや、(口碑的信條が凡ての抗



論は拘はらずして疑なく教ふる如く彼は亡たる者を救ひ又亡たる者のみならず全く異なりたる者をも救ふべきや若し如何なる靈魂も終らぬとせば奚ぞ亡はれし者を救ふを得んや。

「世あらたまり(更生)——(太十九〇廿八)

此句は屢々看過せらるれども確實に萬物の新造を約するが如し、即ち初めに万物を造りし基督が他日之を改造すべきを云ふ(西一〇十五及廿、來一〇二を参照すべし)思想家宜しく復興と審判との關係を視察すべし(前後の文勢を看よ)

「人々皆神の救を見るときを得ん——(路三〇六)

こは賽四十〇五より引用したる者にして結果より見れば二重の觀を呈せり、一はエホバの榮光が彼の人民の爲めに自然に現はるゝと、一は心靈上よりエホバを主と認むると是れなり。——(CHEYNE)然らば此等の

語たる全く普及すべき救の方向を指示するや疑なし、蓋し人もし潔らずば主を見ゆるを得ざる也——(來十二〇十四)心の清き者は神を見ることを得べし——(太五〇八)

「然れども余爾曹に告ん其仇を愛し爾曹を惜む者を善せよ……然らば爾曹は

至上者の子と爲らん——(路六〇廿七及卅五)

然れども余は告ん爾曹の仇を愛せよと無限刑罰を主張せる者は何如して此經句の文字若くは精神と調和するを得るか、明に之を吾人に告げよ。若し神が己れの仇を無限の地獄に下すとせば、何故に吾人の仇を愛せよと吾人に命せしや。又若し神が己れを惜む者に苦難を與へ之を永く罰せんとせば、神は何故に吾人を惜む者を善せよと吾人又告げしや、乞ふ之を説明せよ。

「もし之より勇者きたりて其に勝まきは其特とせる鐘を奪ひ且賊物を分つ



「し」——(路十一〇廿二、太十二〇廿九)

此處に於ては左の數件を斷定せり、(一)基督はサタンよりも強きと、(二)基督がサタンに打勝べきと、(三)悉く其鎧を奪ひ(四)其贓物を分ち即ち奪去るべきと是なり。此所説は各々通常の信條に違背せり、蓋し信條の教ふる所は左の如し(一)惡は善よりも強し(二)惡は數多の場合に於て善に打勝べし(三)サタンの惡に用ふる力は奪はれずして永續すべし(四)其贓物——彼が掠奪したる靈魂——は分たれず、即ち彼より奪去らるゝとなしと。看よ我主が害惡の力を制服するは如何なる俘囚をも陰府に禁錮するに非ずして諸囚を放免するとなり。

「爾曹のうち誰が一百の羊あらんに若しその一を失はば九十九を野におき往て其失し羊を獲るまでは尋ざらん乎」——(路十五〇四)

古昔の註解者は二條の要説を附記せり、曰く(一)一百の羊は萬民なり(二)

凡ての心靈的動物なりと第一の場合に於ては迷ひたる羊は惡人なり、第二の場合に於ては墮落<sup>ニツオルサリスム</sup>は依り天國の羊欄より迷ひ出てたる人類其者なり、而して兩説とも宇宙神教を含むもの、如し、蓋し一説は據れば凡ての惡人、又他説に據れば凡ての人類を獲るまでは之を尋ねべしと云ふを以てなり、羊を以て遷民と比するは全く此譬喩の精神と異なれり、此譬喩は特<sup>ニ</sup>公民と罪人とを指したるものなり、看るべし基督の論據の極めて廣大なることを、彼云く「爾曹のうち誰が之を爲さらん乎」と、看るへし基督の教義の無量の興味あるを、思ふに其意たる人間の感情より立論するの權を許し、而して漂泊者と罪人にも神の感情を分有せしめたるや明なり、又其論據たる神の損失を看よ、其損失は其靈魂を失ひたる人、非ずして人を失ひたる神なり、此事は其他の事實と共に未だ世俗の教義に於て認知せられざるものなり。



「婦のうち誰か金銭十枚をもち、其一枚を失はんに、燈火を燃て家を掃除し、之を獲までは切に尋ざらん乎」——(路十五〇八)

茲に正に等しく廣大なる人性の基本にして又等しく廣大なる多望の教義あり、左よ掲ぐる數件を絶ゆる心に記すべし(一)吾人自身の愛と慈悲の感情は神の感情に對する安全の指導者なり、基督は明に此等の感情に依頼して「爾曹のうち誰か」と問へり、(二)失ひたる靈魂の皆神の失ひたるものなり、故に神は之を回復せんと欲し而して(三)之を發見するまでは尋ね求むべし、(四)失ひれたる者は全く回復せらる、(五)神若し人を失ひたるを感せば常に之を感すべし、故に罪若し無限ならば神の情も亦正に無限ならざる可らず

「それ人の子に喪ひし者を尋て救ふ爲に來れり」——(路十九〇十)

果して然らば耶穌基督は喪ひし者のある間往て之を尋ね救ふべしと

云ふ事は彼の譬喩と彼の本質より之を引證すべし、何となれば彼は常に變らざる者に非ずや(來十三〇八)「喪ひし」は彼の責任よして、喪ひし者の責任に非ず、是れ甚だ相異なる事なり、然らずんば吾人は此一節を左の如く「彼は實に喪ひし者を救はん爲めに來れり、然れども最も充分なる意義を以てすれば、彼の決して喪ひし者を救はざるべし」と解せん歟

「その來りしは……凡ての人をして己れ(基督)に因て信せしめんが爲なり」

——(約一〇七)

然り、凡ての人をして信せしめんとは實に神の目的なり、神がパプチストを送りし目的なり、然れども余は敢て神は自から企つる事を爲し能はざるやと言はんどす、余は明に彼の旨の易らざることを知る(來六〇十七)余は全能不變なる神の不易の目的が終に無有に歸すべしと信すべけんや。



「世の罪を任ふ神の業を觀よ」——(約一〇廿九)

茲にキリストの事業の範圍を顯しせり、彼の任ふものは世の罪に外ならず、若し世の罪を任ふとせば焉んぞ其刑罰の爲め限なく地獄に呻吟せしむる事あらんや、こは全く言を弄するもの歟、若し然らば吾人は基督を稱して「世の罪を任はんとして失敗したる神の業を看よ」と言ひん歟。

「神が其子を世に遣し給へる」……彼に由て世を救んが爲なり」——(約三〇十七)

吾人の反對論者は曰く神の目的は成就せざるべしと、然るに神は其預言者に依て吾人に保證して曰く、神の言は空しからざるべく能く其意を完ふすべしと。

「父は子を愛して萬物を其手に授たり」——(約三〇卅五)

此語の適用は明なり、基督曰く「凡て父の我に賜し者は我に就らん」と、是れ基督の王國の絶對普及を示す所の數多の句節の一なり、約十三〇三を對照して基督に「萬物を賜しこゝ喚其贖死との關係を看よ、又太十一〇廿七を看よ、世人の熟知する召喚の言、我に來れ」の前に耶蘇の言へるとあり、曰く父は我に「萬物を與へ給へり」と、是れ實に注目すべき一關係なり、又太廿八〇十八を讀んで基督に與へられたる凡ての力と其万民の上と於る要求との關係を看よ、又來二〇八及九に於て「萬物を基督と與へられし」と、基督が衆の人に代て死を試みるととの關係は頗る意味あるものなり、彼は萬物を「實」造るが故に又萬物を救ひ復す、確實にして疑を含むものに非ず、神は彼に萬物を與へたり、而して彼に與へられし萬物は彼に來るべし。

「世の救主たるキリスト」——(約四〇四十二)



茲に基督は世の救主と稱せらる、是れ唯基督が實に世を救ふべしとの大希望を謂ふのみ。

「生命を世に與ふる者」——(約六〇卅三)

世界(宇宙)は聖書に於ては不信仰の團塊にして内界の忠義なる選民と相反對せり、然れども此世界は再三基督に依て請求せられ、基督の之に生命を與へ其賜の「易るとなし」。

「凡て父の我に賜し者は我に就らん……凡て父の我に賜し者をわれ一をも失はざるは即ち父の意なり」——(約六〇卅七及九)

吾人は父なる神が基督を賜ひしは或物に非ずして凡ての物なることを知れり、又吾人は此處に於て凡て彼に賜し者は彼に就るべく、其一をも失はざるべし(約六〇十二)てふ基督の約束を有せり。

「世の生命の爲に我肉を賜へん」——(約六〇五十一)

基督が其肉を賜へんとするは世の生命の爲めなり、彼が賜ふものは無益なりや、彼の賜は「易るとなし」即ち假令へ抵抗を受くとも終に功を奏すべきなり。

「耶穌また語て曰けるは我は世の光なり」——(約八〇十二)

此處にても亦基督は世の光と生命なり。

「我もし地より擧られなば万民を引て我に就せん」——(約十二〇卅二)

最も明瞭なる解釋は最も善良なる解釋なり、一部分の引導、即ち一部の救済は彼の語をして不眞實とならしむ、我儕の主の言ふ所は權力を覺らしむるに在り、而して天父に限りし慈悲に適用する語を用て我は實に万民を引て就せんと言へり、彼れ余は引んと試みて失敗すべしと言はず、又斯る意を含まざるなり、此節の註解を讀む者が屢々失望と等しき感覺を惹起す所以は、其註解たる耶穌基督の言はざる所を言はしめ、



其言ひし所を言はざらしめんとすればなり、彼の言ひし所は常に左の如くなるべし。

余は余の貫通すべき手を以て悲痛と罪惡の塗せざる處に凡ての受造物を引擧ぐべし。——(E. B. Browning.)

「我來りしハ世の罪を定んために非ず世を救んためなり」——(約十二〇四十七)

是れ基督の目的の成就すべきとを明に説きたるものにして、若し基督は其爲すために來りし事を成就せざるべしと断定するも非ざるよりは此意を抹殺するを得ず、而して此断定を爲さんとせば基督の勝利の完全を告示する明文に反對せざる可らず。

「耶蘇己の手に父の万物を賜ひしことを知る」——(約十三〇三) 此等の語は吾人をして苦難パツケンの夕を想ひ起さしむ、耶蘇は其時の來りし

を知り又万物の其手に與へられしを知れり、(參照三〇卅五、十七〇二、太廿八〇十八、十一〇廿七、弗一〇廿二)斯の如き時に於る斯の如き知識は深意を寓せり、既に十字架の近づきしとき万物彼に與へられたりとの知識、即ち完全なる勝利の保證は彼を喜ばしむる爲めに來れるなり。

「これ爾われに賜し所の者に我永生を予んがため凡の者を制る權威を我に賜たればなり」——(約十七〇二)

改正譯も尙ほ基督が凡ての者に永生を與ふべしてふ中心たる事實を明示せず、原文の儘にては「爾われに賜し所の凡ての者に我永生を予んがため凡ての者を制る權威を我に賜ひたり」と言へり、希臘文は「明瞭なれども我儕の譯書は基督が凡ての者に永生を予ふるの意たる、凡ててふ語(原文には反復せり)を反復せざるを以て其意義を曖昧ならしめたり、吾人若し約翰の教義を了會せば、救濟に於る神の主權キウケン即ち愛なる



主權に附したる圈點に注目するを必要なりと。

沈<sup>\*</sup>重なる語を以て「全能其者が頑固の罪人を救ふを得ず」と説く者あるに當り之を記隠するを可とす、今救の事に就てハ吾人は駱駝も尙ほ針孔を通過し得べしと明に斷定せり、蓋し神の力を以てせば、万物皆成し得べければなり

〔吾人のカルヅニズムより來る反動は總て聖書を貫徹する所の此眞理に就き數多の讀者を惑はしむ〕故に父ハ万物を分て之を基督に賜ひ〔約十三〇三、三〇卅五、十七〇二、太廿八〇十八〕一定の時に至り〔約十七〇一、二〇四、十二〇廿三、十三〇二〕大工事の諸部各々完成せらるべし。

「事竟ぬ」〔約十九〇卅〕〔參照十七〇四〕

竟りしものハ何ぞ、苦痛即ち十字架の難が、斯の如き時に於て斯の如き説教者が凡て其範圍を於て悉く竟れりと云ふよりも狭き意義を有せ

んことは解す可らざる事なり。至大なる目的と標準とは今や其長さど「廣さと高さとの極點に達せり、凡ての人間を包含する所の救の目的は決して敗れざるべし、蓋し其反對なる事、眞實なるが如しと雖も事竟ぬればなり。

「彼は我儕の罪の挽回の祭物なり、當に我儕の爲めのみならず徧く世の爲の

挽回の祭物なり」〔約壹二〇二〕

茲に世界が眞正の徒弟と比較せられたるを看よ、而して挽回の祭物は僅數の者に限らずして凡ての者の爲めなり、約翰の憂る所は凡ての者の爲めに之を定るに在り、屢々記載せる如く此處にも救の目的の狹隘なる者と廣大なる者とを記載せり、狹隘とは俗説の如く廣大なる者を除去するに非ずして之を包含するものにして最も必要の眞理とす。

「彼ハ罪を除ん爲に現はれたリ」〔約壹三〇五〕



此句は約一〇廿九と比較すべし、基督は彼處に於ては全人類の罪を廣大なる一全体と考へて除き、此處に於ては數多の罪、即ち各人の諸罪を除くなり。

「神の子の顯るゝは惡魔の工を毀たんが爲なり」——(約壹三〇八)

茲に神の子の顯はるゝ眞の目的はサンタンの工を除去するに在りと言へり、然らば苦痛と罪惡の永續するに當り此事果して眞實たるを得べきか、善惡は永存するも而も惡魔の工を毀つべしてふ觀念は正し反對すべきものあるなし、罪と罪の含有する諸物とは惡魔の工なるか、然るや、否や、汝若し聖書の主義を承認せば之を否定するを得ざるべし、然れども若し然諾を以て眞なりとせば、凡て地獄と罪惡と悲嘆とは除去せらるべし。

「父は其子を遣して世の救主と爲せり」——(約壹四〇十四)

父は惡を滅し世を救ふ爲めに其子を遣せり、而して其子は勝利を得へしと言ひながら尙ほ惡は滅びざるへし又世は救はれざるべしと言ふは是れ嘲弄の意を合ひに非ずや。

「懼るゝ勿れ……我は陰府に死の鑰を持ち」——(黙一〇十八)

是れ有味の語なり、吾人基督が其陰府に降るに際し恰も牢門を開く爲めに此鑰を用ひたりしとを記憶せば倍々深味を含めり、若し然りとせば奚ぞ死(第二の死若くは如何なる死も)は鑰を持つ所の(耶穌基督即ち其救の力より離るゝを得んや。

「我また天及地及地の下等に在る凡て造れたるもの皆いへるを聞り、曰く願くは寶座に坐する者と羔に讚美等の歸せんことを——(黙五〇十三)

此等の語は地の上及地の下及海の中に在る所の凡て造られたるものを包含し、皆高聲に讚美の歌を神と羔とに捧ぐと言へり、然り、斯かる目



的に向て凡ての受造物は實に來るなりと吾人は信し且望むなり。蓋し吾人は神が萬物を新にせんと云ふ明白なる約束を信すればなり。然らずんば奚ぞ萬物は此榮光ある歌に和合するを得んや。弗一〇十、腓二〇十一の註を参照せよ。

「死に陸府さは火の池に投入られたり」——(黙廿〇十四)

「全節の意義は世の末に於て肉体上及道德上の罪惡悉く滅さるべしと云ふに在るが如し」——(監督ウアルバートン)

「見よ我萬物を新にせん」——(黙廿一〇五)

こは全しく榮光ある希望にして、或二三の物の爲めに非ず。萬物の爲めなり。萬物より少きものを新にするに非ず。

「我はアルマナリオメガなり始なり終なり」——(黙廿一〇五、一〇八、廿二〇十三)

有識の讀者は知るならん、此節は神に對し最後の二元論を否定する位地を要求するものなり。蓋し神は源泉なりし故に又萬物の目標なり。神は創造の終極なり。河流は源泉に歸るべし。普通神學の了解し難き二元論は使徒の思想、即ち羅十一〇卅六に於て聖<sup>セント</sup>ポールの述べし説と恰も同一なる思想を眞に理會せんとを妨くる障壁なり。

「その樹の葉は万国の民を醫すべし、重て呪詛あることなし」——(黙廿二〇二及三)

茲に未來の復興を就て一の著しき暗示あり、万民の他日未來に於て痊さるべきことを暗示せり。蓋し是れ全く現在の天地の過去(廿一〇二)に次ぐものなり、而して此痊癒の結果として萬物を新にするの外重て呪詛、苦痛、涙涕あることなし。

「萬物の復興ん時」——(徒三〇廿二)



萬物復興せらるべし(Apokalustasis 即ち完全なる恢復)是れ基督の工事の意義なり、アブラハムに對する約束の意義なり猶太の契約の意義(五〇廿五なり)と謂ふべし。神は世界の始めより凡ての預言者に依り之を語りたり、而して是れ一層大なる希望の教ふる所のものなり。

「我も不義も死し者の甦らんことを望めり」(徒廿四〇十五)

此等の語に注意せよ、若し是れ不義に對し望なき刑罰の意を含むとせば聖ポールは不義の甦を望みたるか、有名なる一教父曰く、復活を以て蘇生者に對し無限刑罰の機會と爲るべき一大恩恵なりと考ふる。大癡漢はるれ何人ぞやと。

余は此機に乘し一定の擴張法の聖書を貫通する事實に注意を乞はんと欲す、即ち先づ一家族を選び、次に此家族は一國民に擴り、次に一國民は萬國の民に福祉を與ふる根源よりと告示せらる。此順次の擴張と

共に顯著なる心靈上の擴張あり、天の指定せる供物、精細なる儀式は舊約書に於ても心靈的信條の爲に排斥せられたり、新約書を見るに律法は之と同じく且更に甚しきものあり、基督が其時の一半を人の身体に委ねしことは倉卒の判断を下せば奇異なるが如し、雖も其意たる基督は全人類に注意し此注意は高尚なる復活の約束に擴張する事なり、次に來るは最も意味ある擴張にして凡ての障壁は贖罪の進行に遇ふて倒れ、福音は死し者又悔改せずして死し者にも宣傳へられ、十字架は墳墓に達す、(彼前三〇十八及廿、全四〇六番に然るのみならず尙は一層大なる擴張を十分明に示すものあり、天に在る万物に政を執る者と權威を有する者)——(弗一〇十三、三〇十等、西一〇十五及廿)罪の部内に導かる、如何なる希望も聖書が自から直に告るものより一層廣大なるを得んや、此問題は寧ろ左の如くある可し、曰く吾人の最廣の希望は充分廣大



なりや、凡て神の宇宙に於て一隅一端たりとも終に十字架に依て照されざる處あるべきか、罪も苦も一として痊されざるものあるべきか、世界の極までを算ふるとも神の子に對しては充分廣き境土と謂ふべきか。

吾人は馬太路加及約翰の書中直接又は間接に全人類の救済を教ふる章句實に少からざるを見たり、今吾人をしてパウルの書、ペテロの書及希伯來人に贈りたる書を講究せしめよ、此等の諸書に於て吾人は此約束の尙ほ弘布するを見る、即ち救の普及は精密の言語と種々の引例とを以て之を説明し、無限の害惡と調和す可らざるもの、如し、余は引用する各節自から眞否を示すべしと言ふにあらす、只皆一般復興の教理を含む所の約束の大連鎖に於る句節として適用すべきを謂ふなり、而して茲に緊要なる一疑問あり、假に害惡無限説に従へば吾人は如何し

て斯の如き句節を一層大なる希望に對し順理明白なる要點と看做すを得べきか、聖書が萬物調和等の希望を持つことは拒む可らず、而して若し此萬物調和を以て決して成らざるものとせば如何して此約束を爲すに至りしや、何故に聖書は斯く極めて必要なる事項に於て決して完成を期す可らざる吾人が聞く所に據れば望を起すに至りしや、神託を受たる諸記者は萬物の自然の語意に於ては決して恢復せられざるを知ると雖も尙ほ萬物の恢復せらるべきことを積極的に斷言し、以て吾人の反對論者をして説明の勞を執らしむべき事實を吾人よ示せり、茲に聖パウルの所説に特別の注意を要するは自然の勢なり、彼は恰も政治家の使徒たるが如く其心意を神の目的と人間の運命との全界に馳せり、今余は二點を視察せざる可らず、(一)聖パウルの神の主權を斷定するのみならず、(二)彼の教義の中心に存せり、彼は到る處徐々なれど



も確實に自から完成する目的を認め、其目的は一時抗抵を受るとあるも終に勝を奏すべきことを知れり、(二)此使徒は特に著しく復活を重んじ、其本質より心靈的贖力なりとし、實に基督の人間に對する事業の至高点と爲せり。

「アブラハムに世界の嗣子たることを得させんとの約束」——(羅四〇十三) 看よ、猶太人の神に選ばれたるは實に世界の救済を含むものなり、蓋しアブラハムは世界の嗣子(第六章の選民の部を看よ)にして即ち其遺産として全世界を受くればなり。

「是故に一の罪より罪せらるゝ事の凡の人に及し如く一の義より義せられ生命を獲ること凡の人に及べり」——(羅五〇十六及八)

余は此節の全体の目的と主意との研究を切に薦むべし、思ふに是れ一部の救済と全く一致し難し、而して行文の明白なる如く、此大眞理、即

ち神の治療は罪と共に擴り罪よりも強しとの説を含めり、何處を論せず何人を問はず苟も罪の起りし時は神の慈悲耶穌基督に依りて之を痊す爲めに來るべし、多數(万民)が罪人に爲されたと同一の意義に於て、多數は又義を有すべし、即ち只顯はさるゝのみならず義とせらるべし、而して余は此等の明白なる聖書の語に基づき如何なる靈魂に對するも最後の罪の有様が之と相應せざることを主張すべし、若し無終の陰府ありとせば如何して神の恩(五〇十五)は實に罪よりも強大なるを得るか、反對論者乞ふ其所以を説明せよ、又若し無限の害惡ありとせば如何して慈悲は罪よりも夥多なるを得るか、乞ふ其所以を説明せよ、基礎たる大原理即ち慈悲は罪よりも強く、常に何處に在ても強し(終に)と云ふ事を看よ。

「また受造者自から敗壞の奴たることを脱れ、神の諸子の榮ある自由に入ん



ことを許されんとの望を有されたり。万の受遣者は今に至るまで共に嘆き共に勞苦あることを我儕は知る……予と成んこと即ち我儕の身体の救れんことを俟つ……(羅八〇廿一、廿二、廿三)

セント、ポールの意味の詳細に就ては人々必ずしも一樣に符合せざるべしと雖も、其中心の思想は明白なるが如し。凡て愛造物の虚空(苦難)に歸せらるゝは其願ふ所に非ず、(outo hekousa)然れども此等は只新に生るゝの勞苦たるのみ、凡て苦しむ者は腐敗の囚奴たるを免るべし。看よ茲に(獨り新約書に於て)引用せる全き万物の苦痛は如何、又凡て造られし者(Pasa he ktisis)が救を埃ちつゝありとの断定は如何、又凡て造られし此事は神の諸子即ち初子又は選民(第六章選民の部を看よ)の表現に依て彼等に達すべし。

「若し彼等の棄らるゝこと世の復和となりば其收納さるゝは死たる者の中

より生るに同からず乎。もし舊新のパンキよからば凡のパンも亦深し……(羅

十一〇十五及十六)

猶太人の召喚は神の世界を救ふ(五〇十二)企と相連繫せり、彼等は眞ま神性の意義に於て神の人民なり、彼等に依りて世界の救は成遂げらるべし、彼等は「舊新のパン」として全世界を代表し且之を擔保せり。

「然してイスラエルの人悉く救はるを得ん……(羅十一〇廿六)

茲に使徒の全体の主意と前後の文勢は(殊に五〇七と十〇廿一を若し)甚だ明にイスラエルを(イスラエルより取出したる)「選擇」より區別し、イスラエルを以て「全國民」を表はすことを示せり(又此「選擇」は一層廣き意義に於てイスラエル自から(凡てのイスラエル)「初子」即ち選民を成すとの眞理に撞着せず、既に述べし如く實に律法と福音(四百三十五頁)とに於て二様の「初子」あり)之を約言するに(一)神がイスラエルを棄てたるは唯



外観のみ、蓋し神の召喚は廢滅を可らざればなり、故に、(二)イスラエルの人は一人も餘さず皆救はるを得ん、(三)イスラエル人即ち選民は世界と密に結合するを以て其放棄は(神の奥妙なる方畧に於て)世界の救を表はすものなり、(四)此選民と世界との關係は頗る親密なるを以て之に續て更に一の約束あり、曰くイスラエルの恢復は世界に對し、死し者より生るに同じと、(五)〇十五「甚だ注意すべき一句(第六章死の部を看よ)――蓋し神の賜は廢滅すべからざるものにして凡ての者に及ぼせばなり。

「それは神の賜を召し、易らざるに因る」――(羅十一〇廿九)

即ち神は其與ふる所のものを有功的に與へ、其賜と召は廢滅す可らざるものなり、然るに吾人の譯書は此意義を傳へず、(賽五十五〇十一)を參照せよ、彼の語は終に其目的を失ふ可らず、彼が召ふときは人は聽かざる可らず、(深意の一事)――乞ふ余をして世俗的信條の辯護者に問はしめよ、若し神の召に服従せざる可らずとせば、總て前後の文勢は之を明に使徒の意なりと示すが如し、早晚陰府に於て無限の不從順を容るゝ處ありやと。

「それは神の衆人を憐まんが爲に成之を不服の中に入れかこめり」――(羅十一〇卅二)

原文は成るべく最も廣き意味を用ひたり、聖ポールの説く所のものは人の全塊なり、全体の者憐憫を得んが爲め不服の中に閉鎖せられたり、而して不服の確實絶對なる如く、若し二者相類似するとせば、憐憫も亦等しく確實絶對ならざる可らず。

「それは万物は彼より出て彼に倚り、彼に歸ればなり」――(羅十一〇卅六)

然れども若し然らば神は万物の終極として即ち万物彼に歸るべし、原文の指示する所に據れば、神は源泉たると同時に目標なり、又万物の創



造者なり終極なり如何なる宏壯の外観も能く之に及ぶものなし如何なる神性又は廣大の希望も能く之に及ぶものなし世俗の教義が實際上斯の如き句節を知らざるは素より其自然なり特質なり若し放逐の意を合ひむのとせば其受納との差果して幾何ぞや

「主の曰たまへるは我は治る神すべての膝は我が前に屈り凡の舌は我を讃美すべし是故に我儕おのく己の事を神に訟ふべし」——(羅十四〇十一及十二)

聖ポールは茲に全人類に救を約する大文章(賽四十五〇廿二及廿三)を引用して之を審判と結合せり(第六章審判説參看)全体の文意に據れば基督の万民を支配する王國は絶對にして死者に及び救を含み此救は彼の(未來の)審判と連繫せり懺悔コンフエツヌと譯したる語は適當に言へば讚美オファブレイス或は感謝シヤングスギービングの義なり故に聖ポールが審判日と其結果との真意に於る見解

は無限の零落と直接に衝突せるが如し。

「アダムに屬る衆の人の死る如くキリストに屬る衆の人は生べし」——(哥前

十五〇廿二)

アダムが實に心靈上衆の人に死を生せし如く最後のアダムは實に心靈上衆の人に生命を與ふべし只生命を與ふるのみにては本文の明白なる言語を満足せるを得ず實に最後のアダムに依り心靈上衆人に分與せらるゝ生命は聖ポールの意を明に解釋し得るものに外ならず然れどもアダムに於る死が或場合に於て終局にあらざる如く基督に於る生も或場合に於て終局にあらざるの異論を唱ふる者あらん(一)此異論は正鵠を誤るものなりと答ふるときは恐らく既に足れりとせべし何となれば使徒の思想たる普及の生命は普及の死を承継ぎ且之を吸收せんと断定せるの一點も過ぎざればなり然れども余は更に答ふる所



あらん、(二)本文の明白なる言語は基督に依り衆人よ生命の實際の交通を要せるものなり、然らずんばアダムと基督との比較は眞實あらざるなり、蓋しアダムと人類との害悪の連繋は實に絶對、現實、普及なり、而して等しく現實、絶對、普及なる生と恩との連繋を拒否せるに拘はらず、基督を最後のアダムと稱せるは人を欺くものなり、(三)前後の文勢は基督に依り此生命の永存を含めり、蓋し基督に對し充分の勝利を求むればなり、而して是に由り吾人をして神が終に於て万物の上に主たるべきとを信せしむ、(四)基督に於る生命は斯く常に普及なるのみならず又終局なり、(五)廿四及八)

「蓋かれ諸の敵を其足の下に置ときまでは王たらざるを得ざればなり……」

是神凡ての物の上に主たらん爲なり——(哥前十五〇廿五及八)

終局には一も罪を容るに處なく、一も悪の痕跡なく、又一も陰府なし、蓋

し神は凡ての物の上に主たるに非ずや、彼の國は連綿、普及、絶對なるべし、而して凡ての者の彼に服従まるとは彼が父に服従まると同一にして即ち和合、愛及平安なり、前後の文勢は斯の如く要求を、看よ、基督の事業の最終結果を約言せるに當り、基督自から父に服従まるとこと、基督自身の敵が彼に服従まるとことに就て同一の語を(原文に於ては)用ひたり、然れども基督自身の服従は唯愛と和合なるや明なり、是に由り基督の敵の服従は其悪と苦痛に於る無限の幽閉を云ふに非ず、夫れ神は終に凡ての物の上に主たるべしとの斷定を依りて斯かる概念は大に排除せらるべし。

「死よ爾の刺は安に在や、陰府よ爾の勝は安に在や」——(哥前十五〇五十五)

余は讀者に向ひ此章の全主意を熟考し、以て使徒が其議論を擴張するに從ひ、又死も罪も悉く追放せらるゝ所の未來の光景を其目前に現す



に従ひ、次第に喜悅を増すの狀を觀察せんとを乞ふべし。聖ポールの語は實に明白なり、然れども尙ほ之に過ぐる者あらざるか。聖ポールには實に凡ての基礎を造る所の一の確信あり、彼の熱心なる語は之に對し只不完全に言顯はせるのみ、即ち基督の絶對的勝利と、其最廣の意義に於て萬物の上に注ぐ所の一流の榮光との確信是れなり。

「神キリストに在て世を己と和がしむ」——(哥後五〇十九)

神は世を調和せんとを切に吾人に告んとするか、神は其言ふ所を爲さんとするか、又神は之を調和せんと試みるも終に破壊せらるべきことを徒に爲さんとするか、此疑問は聖書を讀て此處に至り之を世俗的信條と比較するとき屢々起る疑問なり。世俗的信條は救が凡ての者に約せらるゝとき凡ての者を以て或者と爲し、又世界を救はるべしと云ふとき世界を以て多少も拘はらず一部分の人と爲すものなり。

「諸國の民は爾に由て福を獲ん」——(加三〇八)

此の如き本文は神の選擇の眞意を示し、又萬物復興を約束する所の大連鎖の諸環たる事實に於て之を適用すべし、聖ペテロは神が凡て其神聖なる預言者の口に依て之を傳へたりと吾人に保證し、又今は萬物の復舊を云ふものなりと告げたり。

「これ或は天に在り或は地に在る萬物をキリストに歸せしめんが爲に定め

給ひし所なり」——(弗一〇十)

宇宙全体即ち凡ての存在物の全部は基督を源頭として之に歸着すべしと、是れ使徒の意見なるが如し、是れ萬物の調和(西一〇十五及廿)萬物のキリストに服従すること(哥前十五〇廿七及八)萬物のキリストに忠義を盡し之を稱揚すること(腓二〇十及二)と同一の方法なり、然れども若し宇宙及其生存物皆基督に歸するとせば無限の陰府或は永く分た



れたる万物は何處に在りや、一に歸するとの譯語は此處と羅十三〇九とに在るのみ、律法が一の訓誡に歸する如く宇宙は他日基督に歸すべし。

「神の一切の物を彼の足下に置く」(弗一〇廿二)

此處の原語は基督が父に服従するに就て用ひたる語(哥前十五〇廿八、腓三〇廿一)と同一なり、彼處の註解を看よ。

「異邦人同に嗣子となる」(弗三〇六)

即ち猶太人と共に嗣子となり、然れども猶太人に與へたる約束はイスラエルの人悉く救はるを得ん(羅十一〇廿六の註解を看よ)と云ふに在り、而して猶太人と異邦人とは同一と爲さるゝ(弗二〇十四)に依り、凡ての異邦人は凡てのイスラエル人に與へたる約束(羅十一〇廿六)中に包含せらるゝが如し。

「彼はもろくの天の上に昇りよるもの物に満ん」と(弗四〇十)

然れども若し基督が万物即ち宇宙に満るとせば惡は如何して永存すべしか、是れ基督は神の如く常に万物に満ざるや否と問ふに當り避くべからざる問題なり、蓋し使徒に對しては基督は其完成する事業の結果として(惡を退けて)万物に満つべし、と云ふ更に特別なる意義あり。

「万物すなはち地上に在るもの天に在る者をして彼に由て己と和がしむ」

(西一〇十九及廿)

余は喜んで余自身の註解に代ふるにライトフット氏の五章十六節に於る註釋を以てすべし、曰く「万物は中保者たる神子に於て、又神子に依り、最初の根原たる天父に於て會合點を求め、終に其發源たる彼に調和せざる可らず、神子は宇宙の最終原因並に創造力なり、現在神約の至極の目的は諸多の章句に於て等しく説明せらる、そは時としては羅八〇



十九の如く基督に依り万物の生産の苦痛及赦免として現はされ、時としては哥前十五〇廿八の如く万物が彼に純對最終の服従を爲す事と爲り、時としては二十節以下の如く彼に依り万物の調和する事となり、時としては弗一〇十の如く万物を彼に歸復する事となれり、此等は皆語を異にするも同一の眞理を説明せり、永遠なる語は宇宙の目的なり、蓋し彼は其起程點たればなり、是れ唯一より進めば唯一に終らざる可らず、而して此唯一の中心は即ち基督なり」と、余若し如何なる言を附加するも此等の語の説明に違背すべし、凡て永遠の語より出てたるものは調和せられ清潔となされ興復せられて皆其目的たる彼に歸るべし、茲に引用せる語より如何なる他の意味をも明に抽出すべからず。

「天に在るもの、地に在るもの、及び地の下に在るものをして悉くイエスの名に由て膝を屈しめ、且もろくの舌をして悉くイエス、キリストは主なりと稱

揚せしめん爲なり」(腓二〇十及十一)

こは聖ポールの大示現の説なり(黙五〇十三)即ち天は在るもの、地に在るもの、及地の下に在るものをして悉く最も高き神に讚美等を歸せしむを云ふ。又一層廣く描出して曰く、天に在り、地に在り、地の下に在る凡ての膝を屈しめ、又もろくの舌をして神を稱揚せしめんと、原文の語勢斯の如し、ライトフト氏曰く万物は何物たるも何處に在るを論せず、全宇宙は有生と無生とを問はず忠義の膝を屈して讚美の聲を發すべし」と。

「万物を己に服はせ得るなり」(腓三〇廿二)

此万物の基督に服従することは如何なる意義に解すべきか、前後の文勢を看れば明なり、曰く「彼は万物を己に服はせ得る能に由て我儕が卑き體を化て其榮光の體に象らしむべし」と、此意義を熟思せよ、何人も基



督が万物を服へ得ると疑ふを得ざらん然れども此節の確示する所は基督の万物を服従するとは(聖書の意に於て)之をして己の如くならしむるなりと云ふに在り(哥前十五〇廿五の註を看よ)

「我儕の救主なる神は万人を救ふを望み給ふ蓋し神は一位なり」(提前二〇三及四)

「何人も神の望み給ふ行爲を妨るを得ず今神の望は万人を救ふに在り(聖ゼロームの弗一〇十一に於る説)聖ポールは神が萬人の救を望むと云ふ明白なる理由を以て萬人に感謝及祈禱を捧ぐべきことを茲に示せり而して聖ポールは此神意を以て神の唯一に歸せり是れ此節に重きを置かしむる一事なり蓋し唯一の神は只一の永遠なる(抵抗し難き)目的を有するを得ればなり神は一なり一にして全し全きを一に結合し一を全きに結合し又全きを一と爲す」(ジェー・ホワイト氏萬物の復興

説)此神の單一なることは算術上の命題たるのみならず深遠なる心靈上の事實即ち單一は神の企の本質なることを示す造物者一にして受造物常に二(即ち常に二種に區分せらる)なることは聖ポールに取り理會す可らざる事なり(第六章の末を看よ)

「神は万人の救主にして殊に信する者の救主なり」(提前四〇十)  
神の企に依りて選民(信する者)先づ救はれ次に現在或は將來に於て万人を救ふの手段となることを願れば此節に於て如何なる曖昧の點も明白となるべし。

「我儕の救主イエスキリストハ死を廢せり」(提後一〇十)  
死は廢せらる而して聖書に謂ふ所の死と共に罪と惡も亦廢せらる死は廢せらるゝも尙ほ最も惡しき形狀に於る死即ち第二の死を永く維持せんとするは明白なる矛盾なり状態的不滅説を主張する者は死は



廢せらるゝも尙ほ滅亡の宣告に於て凡ての罪人の吞まらるる所以を如何にして説明すべきか。

「夫凡ての人に救を賜ふ神の恩あらはる」——(多二〇十二)  
 然り「凡ての人に救を賜ふ」と是れ正に大希望なり然れども吾人の明く聞く如く神の賜は易るとなく、即ち實効ありて廢す可らざるものなりとせば「凡ての人に救を賜ふ」とは無數の人又は何等の人たりとも死後の苦難を受るてふ説と奚ぞ矛盾なきを得んや。

「彼は又往て獄にある靈に傳へたり」——(彼前三〇十九)  
 此等の語は罪を犯したる死者の狀態に就き世俗に傳ふる妄説を全く顛覆するものなり蓋し救の作用を以て死後に及ぼすものと明に斷定すればなり。注目せよ、基督は彼等に福音を傳へ、又左に示す如く彼等を救へり、彼等は當時最大なる光に背きて罪を犯し其罪に依て死せし者なり。

なり。

「福音は死し者にも宣傳へられたり、蓋彼等をして審判を受ることも其靈ハ生命を得しめん爲なり」——(彼前四〇六)

茲に亦審判と救との關係を看よ、悔改せずして死し者も審判の便を得て以て神に生命を得ん爲めに福音を傳へられり、第六章審判の部を看よ、斯の如き經句は文字の儘にても口碑的信條の根枝を芟除するものなり。

「主は一人の亡ぶるをも欲し給はず、衆人の悔改に至らんことを欲し給へり」——(彼後三〇九)

然らば若し何人たりとも終に亡ぶる者あらば神の志望終に敗れたり、と謂はざる可らず、良好なる目的の爲めにせる一時の抵抗は神意の最終の挑戦と全く異なるや明なり。



「彼は其子を立て万物の嗣と爲せり」(來一〇二)

此等の語は若し充分明白に之を解せば大希望を説示するものなりと謂ふを得べし、此等の語は基督の治世の純對普及なるを教ふ、而して聖書の數多の證據は之を以て愛及平和なりと示せり。

「爾万物を其足下に服せしむ」(來二〇八)

茲は基督の王國は萬物の上に及ぶべしと説きたる諸種の句節(即ち弗四〇十、腓三〇九及十一、黙五〇十三等)を附加すべきものあり、基督に服従することは新約全書の慣例に従へば完全なる和合及平安の意なりと(腓三〇廿一、哥前十五〇廿五)を看よ、余既に之を示したり、此著しき一節は基督の死を以て、凡ての人(五〇九)を包含すると爲して尊重せしむるものなり、記者は既に人の品位と其洪大なる遺産を單に人として(五〇六及七)強く斷言せり、此品位は墮落に依て損害せられたるも、人の子

基督に依り回復せられたり、而して基督をして万物の(何物にても)出て万物の倚る所の(彼神)の意を満さしむるは正當の事なり、此語は最大なる希望を與ふるものとす、蓋し神は万物の目的なればなり、(羅十一〇卅六を看よ)

「彼が死をもて惡魔を滅ぼさん爲なり」(來二〇十四)

然れども死の權威を有する惡魔を滅ぼすことは死と惡の永續するごとと全く矛盾せり。

「彼の旨の易らざること」(來六〇十七)

神の目的の外見上失敗あらんとは吾人の許す所なり、然れども眞實の失敗は當にある可らざる事なり、神の易らざる旨の何物たるは彼後三〇九に於て吾人之を見る、該處に「欲す」と譯したる原語は此處に「言ふ旨」と同一なり。



「彼は己を犠牲となして罪を除かんが爲に現はれたリ」(來九〇廿六)  
 罪は神の企に於る失敗の状態を惹起せり、基督は罪を除かん爲に來れり、吾人の反對者は基督果して失敗するか、或は其目的を達するか、其取捨又苦しむや明なり、蓋し基督若し失敗するとせば聖書に背くべく、又基督若し成功するとせば汝の教條に違ふべし。

「イエス、キリストは昨日も今日も永遠變らざるなり」(來十三〇八)

「世々變らずと云ふ語は恐らく人の注意を惹くこと少うらん、然れどもこは眞に福音の本質即ち吾人の希望の綱領を含有するものなり、何故に此等の語を教ふる乎、是れ基督は現今救世主にして未來又於ては只刑罰を與ふる審判官たるべしと云ふ皮相の説に非ずして、基督は今あり又未來あるべき所の地上又於て永遠變らざるなり、常々審判するも是に由り救世主たらん爲め審判官たるなり」と云ふ事なり、此等の語は

吾人をして永く未來を觀察し、耶蘇基督の尙は救の爲め働くことを知らしむ、其人を救ふや頑固なる罪人又は嚴法刑罰を用ふると疑なしと雖も、而も尙は同一の耶蘇即ち救主たり、而して此救主は最後の漂泊者を見出すまでは其救の業を棄てざるべし。

扱一層大なる希望を教ふる章句を悉く引用し難しと雖も、余は其他同一の理を含み若くは之を教ふる所の數多の經文を引證すると甚だ容易ならん、今主の祈禱の二句を擧んに「我儕の父なる語は實に全問題を包括し、人と神との間に決して破壊す可らざる關係を造れり、爾旨の天に成べく地にも成せ給へ、然れども爾旨の天に成るとは如何、うは一般に成るゝなり、然らば地上に於ても亦一般に成さるゝ又あらずや、基督は假令へ吾人が望み得るより一層大なる度に於てせよ、爰乎自から完成を欲せざる祈願を吾人の口に唱へしめんや、余は又神は愛なり」と



云ふとを引用せん、凡て神の屬性は皆此點に輻輳すべし、愛は結合して無限不易の愛を造る所の品性なり、此愛は自己の子を無限の苦難に交付するを得る歟、無限の愛は愛を中止し得る歟、使徒の答を以てせば、愛は決して亡びず、消滅す可らざるものなり。

以上の簡短なる記述に於て余は力を盡したる註釋を期せざりしなり、只余の目的は人間の未來の運命に關し引用せる諸節の明白合理なる意義を指示し、最も簡短正直に此意を現はさんとするに在り。殊に余は神聖なる記者の論説は通常の字義に依て解釋すべしと斷言し、以て眞實の必要を勸告せり、即ち、余ハ万物を新にすと言へど基督の意たる實に万物に在りて二三の物にあらず、又、神は万人の救主なりと言へば使徒の意たる神が實に万人を救ふに在りと了解すべし。

余は既に述べたる(四百五十六頁)三種の問題を茲に再説して局を結ばん、(一)基督の救の目的は吾人人類の少數者に限らずして其全体を包含

する爲めに考定せられしものなり、(二)彼は此目的の爲めに凡ての權力、即ち何物たるを論せず、何處を問はず、凡ての意志、凡ての害惡、凡ての妨碍を制する權力を受領せり、(三)此業を全く成就せんことは聖書の要求する所、預言者の要求する所、傳道者の要求する所、使徒の要求する所、基督の要求する所なり、(賽四十五〇廿二及三、六〇十一、五十三〇十一、約十二〇廿二、十七〇四、哥前十五〇廿二、廿七、及八、羅五〇十五及廿一、十一〇廿九及卅二提後一〇十等)

茲に數言の懇切なる注意を附加せざる可らず、余が普及救濟を教ふるに當り瞬時も罪を輕視し、或は罪を沈淪せる者の救を辯護せざるとは以上の所説に於て明白なりと信ず、余は切に刑罰の確實を斷言す、頑固なる罪人に於ては、其期限なり、其性質なり、甚だ恐るべし、然れども刑罰は凡ての場合に於て愛と義とに依り終に惡を滅すべき方針に従ふ者



なり、加之世俗的信條は實に罪を輕視するとを人に教ふるを以て此理由に據り余は之に反對せり。又尙ほ二條の理由あり、世俗的信條は第一應報の方法を顯はすと正しからず、其刑罰は決して課せられざるべしと密に信せしむればなり。次に神は罪惡を制服滅亡せざるべし、或は之を爲し能はざるべし、而して永く罪惡を忍ぶべしと實に斷定すればなり。余は重ねて言はん、神を以て其神聖なる律法を犯すも之を顧みざるが如き單に優柔者と爲さんとする傾向の一言も本書に記載せしとなし、神は余が斯る淺薄なる神學を教ふるとを禁せり、無限の愛は一種の物にして、無限の優柔は全く之に異なりたる物なり、愛は決して薄弱とならず、最も温和なる時も最も堅く變せざるものなり、カルヴェグラーの說に吾人は罪あることを知らざる可らずと言へり、然れども吾人は戒しむべし、吾人は十字架を想像するに當り、基督の結局失敗せんとを人に教

へて其救の力を限制し眞に贖罪を汚すの恐あり、又吾人は言語よ於て基督を尊崇すと自白するも實に彼をして虚言者たらしむる恐あり、蓋し彼は余若し擧げられなば或人を引くべし、とも亦「最多の人」を引くべし、とも言はず、然れども余は萬人を引て我よ就せんと言へり、



## 第九章 新約全書の教説

「神聖なる記者は決して通常言ふ所の意義に由て地獄なる語を用ひざるなり」——ドクトル、エルキスト、ベタヴェル氏——「永生の競争論」

「吾人は恐らく或大誤謬に陥りしならん、基督教は他日之に就き吾人を赤面せしむべきと、恰も拷問、奴隸、宗旨の禁制に於るが如くならん」——Viner.

「汝は只聖書の一面を窺ふに過ぎず」てふ抗論は屢々吾人の耳に觸るゝ所なれども、思ふに此章に於ては斯る抗論の爲めに費すべき餘白なからん、不悔改者の終に滅亡せらるるを教へ又處々に其無限の刑罰を教ふるに英語の讀者に見ゆる一潮流の聖書を貫流するは最も眞實の事にして余は最も充分に悉く之を承認す、余は注意して茲に「教ふる」と見ゆる」と言ふ、蓋し聖書の數多の文句は十九世紀の或英人が其同國人に對して思考する如き英語を以て記載せられしものにあらず、其由來甚

だ舊く、甚だ數多の部分に分れ、甚だ數多の人の手に成りたり、然れども等しく皆東洋の主義を以て書し、東洋風の思想を飽和し、東洋の語法文體を用ひたる故に皆疑問の語を用ふる所の意義に屬せり、乞ふ聖書其物に就て之を決定せん、(本章の馬三〇十二註の下項を見る者は其處を用ひたる甚だ強き語句が絶望の滅亡を指示すると大に異なるを知るべし、聖書其物の用例に於て「死」及「滅亡」は實に屢々生活に達する通路たり。——十六及十七頁、三百十二頁、三百八十一及九十三頁等を看よ)

故に此二種の潮流を認むれば吾人は直に其性質に於て同等ならざるを覺るべし、吾人は天性に依り其一方の神性を覺るべし、其神性は一層深遠、神妙、廣大、堅固にして、吾人は吾人の性質に於る最高なる者と全く其種を同くするを覺る、但し余は吾人が最も善く愛する者を謂ふに非ずして吾人が神に於ても人間に於ても等しく最善良且最神性なりと



承認する所の者を謂ふ。

然れども恐怖の潮流は一層烈し否余は斯く思はざるなり、是れ習慣に由り又は罪人が廣大神性なる所も容易に登らざるより斯く見ゆるならん、彼等も對しては復讐は愛よりも一層信すべきものなり、然れどもそは一層烈しき潮流なるにせよ、余は神が尙ほ小聲にて常に發見せらるゝことを指示すべし、聖書の眞意は常に又屢々表面上に現はるゝ者にあらず、故に救世主の預言に於る皮相の解釋は征服者及赫々たる現世の勝利を説て全く猶太人を欺きしと雖も、其眞意は表面の下に存し、一層僅少に一層著明ならざれども、苦難の救世主即ち其苦難の生涯の一層神性なる預言に存せり。—— See Sabo. Mund. 斯く覺れば余は凡ての明白を以て凡ての事實に對し又正直充分の試験を求むべし、余は罪人に對し威嚇せる刑罰は疑なく恐るべきものなり

りと雖もそは尙ほ無限に非すと云ふ事を示さんと欲す、若し明白に翻譯會せば聖書中何處に於ても一句も斯く教ふる者なしと余は信するなり、余は此等の章句を檢するに先だち注意して次の考察を心に記せんことを讀者に乞はざる可らず、(一)無限の罪苦が聖書の(想像せる)憑據に於て斯く強く辯護せらるゝ時は奴隸の制が千五百餘年間極めて同一なる論據に於て異口同音に辯護せられし事を想起するを可とす、最も殘酷なる拷問の刑も斯くの如し、筆紙に述べ難き慘狀に遭遇せし宗教の迫害も斯くの如し、巫女の存在と生ながら彼等を焼くの義務も斯くの如し、加之歐洲の神學者は皆數世紀間惡靈と男と女との間も實に交合ある事の眞實なるを説きたり、汝は云ふ、神聖の人は到る處聖書の憑據を以て無限の苦痛及害惡を辯護すと、余は答ふ、神聖の人は全く協同して、經典の憑據を以て人が想起せんと欲しても戰慄する程厭ふべ



き教理と行爲とを辯護せりと、(二)最も深き意味の事實は下の如し、即ち假令へ無終の觀念を傳へたる或章句ありども此等は一として我主及其使徒が不悔改者の未來の刑罰に適用せしものにあらず、願くは有志の諸子此甚だ著しき事實を熟慮せよ、(三)故よ *avidios* 又は *atelenetos* なる語は新約書に於て決して未來の刑罰に用ひられしとなく、又何處にても刑罰は *anulolous* 即ち無限なりと云ふとあし、又刑罰が *panote* 又は *eis to dienekes* 即ち永遠に續くべきとは吾人の目に觸れざる所なり、(四)余は問はん我主及使徒の引用せる舊約書の希臘譯と新約書とに於て慣用せられたるも、其實甚だ相異なる意義と認むべき曖昧なる言語を以て、數百万の不幸なる人民に對し、凡て人間の全く思想し得ざる程恐るべき審判を宣告すると云ふは、果して理會し得べき事なるか、(五)新約書の憑據に依り宇宙神教を教ふる所の數多の古代の意見(殊に希臘語と

解する諸教父の説)を知るは、實は新約全書に於て無限刑罰の教へられざることを斷定する説を確證するものなり、——(百六十五、三百十一、三百五十五頁を看よ)凡て斯る教説は通例信を措く所の經文には無限刑罰を教ふるとなしとの斷定を明に含むものなり、(六)又万民救済の爲めに引用せる經文は明白なる言語を用ひ、總ての場合に於て原文の明白なる翻譯なりと雖も、通例無限苦難を證する爲めに引用せる章句の場合に於ては然らざるなり、英文の讀者に對し斯く教ふると見ゆる場合に於ては、其語句誤譯なるか、誤解なるか、又は此二者を兼ねるものなり、是故に無限苦難を教ふる如き語句聖書中に在り、と一般に唱ふる假説の實に不精密なるを知るべし、此等の語句は或人間の欺かるべき聖書の翻譯なるのみ、是れ全く異なりたる事なり、(六)又注意すべき事あり、通例口碑的信條と維持せんが爲めに引用せる少許の語句は、暫く其翻譯を



精確なりと認めば、(通常の讀者に)最後の滅亡を教ふると見ゆることあらんも、一として無限苦難の斷定を含むとなし、(七)終に臨み以上諸件の外、口碑的信條の辨護者の前途に一大困難の横はるあり、彼等は自家の主義を行ふを敢てせず、彼等の聖書解釋主義は彼等をして強ひて其信せざる所のものを信せしめ、又合理的人士の敢て教へ得ざる所ものも教へしむるならん、(甲)第一、そは彼等をして多數者少くも凡ての大人(十三及十四頁を看よ)の無限苦難を強ひて信せしむべし、(乙)次にそは彼等をして此苦難が聖天使たち及び羔の前にて之を満足せしむる爲めか)——(歌十四〇十)——又實に恐らくは凡て幸福者の目前に於て——(賽十六〇廿四及路十六〇廿三)——永遠に繼續する事を強ひて信せしむべし、然れども彼等は此二件を信せず、又神が害惡を創造するとの説を信せざるなり。——(賽四十五)又余の知る所を以てするに、彼等は此等の

説を文字通りにすれば神に不相應なり即ち不徳義なりと云ふ事の外一も之を信せざる理由を有せず、實に彼等は斯く己を咎むるなり、又彼等はイスラエル人が倒れて最早起たざるを實に信せざるなり——(歴五〇二)——又彼等は聖書に在る同種の數多の威嚇を文字の儘に採用せず又採用する能はず——(本章太三〇十二の註解の下に在る一節を看よ)(八)全く不正ある翻譯の例證として、ヘルムゲルネーシオン「地獄」墮落エスパーラスチング「永遠」無終アンヘンヘンと譯せる語を擧ぐ、ゲヘナ「地獄」とは三箇の大に相異なる希臘語、即ち「Gehenna」、「Hades」、及「Tartarus」の翻譯なり、以て我英譯の精否を見るべし、「Gehenna」は新約全書に於て我主が用ひしと十一回、雅各ヤコブが用ひしと一回あり、原文の希臘語に於ては希伯來語より殆んど變せずして採用し、(Gehenna, i. e., valley of Hinnom) Gehennaを譯するに其儘 Gehennaを以てせり、是れ我翻譯者の宜しく遵奉すべき模範なり、彼等は其免れ難き連念を以



て地獄なる語を守るに依り實に此疑問を臆斷し、翻譯者に非ずして寧ろ註解者の職分を冒せるものなり、此谷はジェルサレムの郊外に在り、昔時は愉快の谷なりしが後モロツク (Moloch) の禮拜場と爲り、終に共同の汚物投入處に變したり、而して其中に腐敗物、動物の死骸又恐らく罪人の屍を投棄し、而して之を清めん爲め常に火を燃し、同時に小蟲常に其腐敗物を喰へり、而して所謂不死の蟲と火焰とは種々の説を附する者あれども(甲)少くも其字義上及最初の使用に於ては現世的及有限的にして(乙)唯死体のみを食ひ(丙)之を清めん爲めなりき、是れ誤て無限苦難の教條の基礎と爲りし語句を適當に理會するに切要なる三件なり、Hades は善惡に拘はらず死後靈魂の状態又は場所を表示する語なり、我訂正者等は迂遠の判斷を以て其翻譯の如く其解釋より「地獄 Hell」を案出せり、此語は福音書及書信エペソに顯はるゝと五度使徒行傳に二度、默

示録に四度なり、とは死に續く所の中間の状態又は場所を表し、其状態たる吾人が羅馬教に反動を起せしより殆んど全く認識せざるに至りしものなり、Tartarus は新約全書に於ては唯一回文字通りの形狀を以て(彼得後書二〇四に顯はれしのみ、此語も亦屢々惡人の未來の刑罰の代りに(常)然るに非ざれども)用ひられたる聖書の語なり、此處に於て彼得の之を人類に適用せずして迷へる天使に適用したり、而して此等の場合に於て此語は苦難の最後の場處を表すにわらず、留りて其最後の審判を待つ所の牢獄を云ふ、故に之を譯するに地獄 HELL なる語を以てするは實に誤れりとす。Damnation (墮落) damned (墮落せられたる) なる兩語は單に二箇の希臘語及其支語 *temno* 及 *kataleino* 即ち審判及刑罰を表示するのみ、我訂正者は以前の翻譯の實に不當なりしを悟れり、蓋し其理由たる夫の教權を有する翻譯の成りしと云ふ *tan* (墮落) なる語の



意義の爾後附せし意義よりも遙に寛裕なりしと云ふも在り、實に Hell  
「地獄」なる語に於る如く此等の語に無限苦難の觀念を含ましむるとは  
全く不正にして誤謬なり、何とさればそは單に「審判」の義にして之を最  
も甚しとするも「刑罰」と云ふに過ぎざればなり。

彼後三〇三に於て Damnation なる語は一の異なりたる希臘語 *apoles* を表せり、  
而して此處に於て我訂正者が之を Destruction (滅亡) と譯したるは其當を得た  
り。

新約全書の原文に於て以上の言語に依り屢々誘起したる無限苦痛の  
恐怖は左の意義を知るに至れば消滅するや最も明なり、即ち Damnation  
の單に Judgment 審判の義にして之を最も甚しとするも Condemnation  
刑罰の義なり、是れ我訂正者が現今其翻譯書に於て充分承認するが如  
し、又 Hell の脱去せる靈魂の場處 Hades (我訂正者が今之を譯する如く)

か又ハ猶太のゲヘナ Gehenna (訂正譯を見よ) 即ち其字義に於て蟲常に  
食ひ火永く燃る所の一時の刑罰の場處を示すのみ、然れども何れの場  
合に於るも之れを清むるものにして毫も苦惱を起さざるなり、蓋し其  
体は死者の体なればなり、而して「不死」の蟲と「不滅」の火は久しき以前に  
其文字通りの意義を失ひたり、Gehenna は猶太人が譬喩として未來刑  
罰の場處に用ひたるや疑なし、是れ充分承認すべき事實なり、然れども  
フアラ一(慈悲と審判百八十頁より二百十五頁に至る) コックス(サルヴ  
エーションマンデー七十頁より五頁に至る) 及千八百九十年八月「十  
九世紀」の一篇(又百五十四頁より引用せるブファッフを看よ)に依り引用  
せられし證據の正式上少くも Gehenna が無限刑罰を含有すると信ぜ  
られざりし事を明白ならしむるが如し、そは實に救を爲し得べき場處  
にして、恐らく之より救ふを正規と爲せし如し、猶太人の意見は決して



確定せざりしも未來刑罰の細目と永續と不就て大に疑惑せり、或猶太教師は二三の教父の所爲の如く悪人の最後の滅亡を主張せしが如し、無限の苦難は我主に依て威嚇せられざるも而も主の語が最も莊嚴なる警誡を罪人に傳ふる事は眞實なり、最も眞實なり、此警誡は其眞意を辨別すれば實効を奏すべきものとす、是れ良心が其相當の罰を認知すればなり、故に余は聖書に於て罪人に對し威嚇せる各刑罰と各警誡恐るべきものとを其眞正自然の意義よて實に承認すべし、然れども其眞正の意義は余が示さんと欲する如く何處に在ても無限の害惡及苦難の意義にあらざるなり、俗説の辯護者と余の爭論は聖書に關係する所に據り左の如し、即ち彼等は一部の經文を對して其明に含有せざる意義を與へながら、同時に普及救濟の爲め新約全書に備へられたる甚だ廣大貴重なる種類の語句を全く抹殺して實に聖書より削除せり、故に屢

々其例ある如く人若し唯一側面のみを見て之を固執せるときは、其側面さへも眞色を理會し得ず、恰も之を全部の如く吾人に示すものなり、次に *anon* 及 *anionos* なる語の眞意を考察せん、

「此語は自から形容詞たるにせよ、名詞たるにせよ、決して無限の意を有せず」——(カノン、プアラ)、「セミチツタ語に於る永遠の概念は時代の永續及運累の概念なり」——(宣教師ツエー、エス、プラント)——神學字書、監督、ラスト曰く猶太人は希伯來語を以て又は希臘語を以て記載するに拘はらず *anion* に應ずる希伯來語) 及 *anon* に依て、生活よせよ、神約にせよ、國典よせよ、顯著なる時期及永續の意を表はすとは人の明に知る所なり、*anon* なる語は聖書又は其他何處に在ても決して無限(俗に永遠と稱す)の意味にて用ひられず、それは經典にても其他に於ても常に時期の意を表せり、然らずんばそれは何如く複數を有すを得んや、如何く經典に於る如く *sons* 及 *sons of son* を謂ふを得んや、——(シ



「キングスリー」故に希臘人は毎百年に行ふセキユラルゲームス(祭典の名)を eternal 永遠と稱せり。— See Huet, Orig. ii. p. 162.

此等の語は我翻譯者が エウアラシス、キング、フオーア、エウアー 永 續 無 終 杯と譯したる語の原語なり、世俗の無限苦難の教條は斯く誤りたる翻譯に基因せるものにして余は之を誤謬なり不正なりと謂ふを躊躇せざるなり、蓋し aion は (an age) 時代の意義にて、長短に拘はらず、又屢不定なるにせよ、有限の時期を謂ふなり、又 aionios なる形容詞は (of the age, age-long, aeonian) 時代、年期の義にして決して(其自個固有の力に由るも) エウアラシス、キング 永 續 の意にあらず、但し形容詞として無限なる者に適用せらるゝとあるは眞實なれども、凡て斯る場合に於ては無限の觀念たる形容詞より來らず、唯其形容詞が適用せらるゝ所の目的格に附着するを以て然るのみ、即ち神の場合に於る如し、永遠生活の意義に於ては之を記述せし者數多あり、全く時の概念を除くは

(マウリスと共に)行はれ難きが如く、又新約全書及七十子譯書の普通の用例に反せりと雖も、之と同時に吾人は永遠の生活(aeonian life)なる文句が現世を超へたる部分、即ち全く道德的及心靈的の部分に往々用ひらるゝことを充分に認むべし、故に約翰傳に於て謂ふ所の永遠の生活は長さを以て測る可らざる生活なれども、見る可らざる生活、神に於る生活なり、されば神の命と給ふ所の即ち永生なり(約十二〇五、十)永生とは神を知るとなり(同上十七〇三)基督は永生なり(約壹一〇二と五〇二十)故に通例 aionios の現世に關するを認むるに由り吾人は此觀念の上にて起るべき傾向、即ち空虚又は浮世に反して眞實と靈界とを指示し、分量より寧ろ性質を表はすべき傾向を此語に於て認むべし、此意義に於て永遠なる語は今及此處に用ひらるゝなり、されば エテナル 永遠の刑罰と エウアラシス、キング 無窮の刑罰とは甚だ異なりたるものなり、而して我訂正者は新約全書中 aionios



なる原語を存する各節に於て「永遠」なる語を「無窮」なる語に換用せり、且吾人若し此語を厳しく用ふるとも永遠の刑罰は爲し得べからず、蓋し「永遠」は精細に言へば無始無終のものなればなり。又茲に大に重要な一事あり、即ち舊約全書に於て「永久」なり「無窮」なりと言はれしモーセの律法に有限（且甚だ有限）の期を指定するとなくして基督を受容せんとするは恰も吾人の爲し能はざる如く猶太人の爲し能はざる所たりしならん、新約全書の各行否基督敎の眞の存在は斯く實に聖書に於る *aiōnios* の有限なる意義の證據なり、耶穌の名を以てする吾人の洗禮、吾人の聖餐、主耶穌の名に於てする基督敎會又は吾人の家内にて捧ぐる總ての祈禱、吾人の常に主と共に在るの希望、此等は皆 *aiōnios* が一時の意義を有する事の最も確實なる（假令へ之を言はざるも）斷定を含むものなり。

更に *aion* 及 *aiōnios* の意義を解明せんが爲め、舊約全書七十子譯書の希臘譯に於て、此等の語が永く生存を止めたる者に反復適用せらるゝとを指示せん、蓋し此希臘譯は我主の時代に猶太人の一般に使用せしものにして、我主及使徒も通例之より引證したるを以て、其憑據は此點に就き是非を決定するに足るべきものなり、即ちアローニツクの祭司は「永續」なりと言へり（民廿五〇十三）カナンの地は「永久」の所有として與へられ又「永く」興へらる（創十七〇八、及十三〇十五）申命記第廿三〇三に於て「何時までも」*for ever* は明に「十代までも」*even to the tenth generation* と同様の意義に用ひられたり、哀五〇十九に於て「永遠」*for ever and ever* は「世々」*from generation to generation* と同一義なり、利廿五〇四十六に曰く「パレスティンの住民は「永く」*for ever* 奴隸たらん、民十八〇十九に曰く「擧祭とまゐる所の聖物は「變らざる」*for ever* 契約なり」と書十四〇九にカレブは「永く」



for ever 其産業を保つべしと云へり、又ダヴ非ツトの子孫は、永く續き、其位は、永く續き、其家は、永く續くべし、加之除酵節は、永く續くべし、又賽卅二〇十四にオヘルと權とは、靈我儕に、ろくとき來らんまで、永く、洞穴とならん、故に猶七に於てソドム及ゴモラハ永遠(continuum)の火の罰、即ち火に依る現世の滅亡を受ると云へり、蓋し彼等は最後の復興の定約を有すべなり、結十六〇五十五、又基督の王國は、永く續くべしと雖も、此國其物は終る時ありとは吾人の明に聞く所なり、哥前十五〇廿四、實に此有限なるnon 及其支詞の意義を證明せんとせば、聖書よりも古代の記者よりも續々例證を擧るを得べしと雖も、恐らく既に述べし所を以て、無限なる期限の觀念が必ず、又は通例、non 若くは aionios に含有せらるゝとを争ふは全く爲し得べからず、又實に無稽なり、と云ふ事を證明するに足らん。

且若し aionios を無限の意義にて永遠(eternal)と翻譯するを至當なりとせば、aion は永遠 eternally 即ち無限の連續の意義とならざる可らず、然れども斯く翻譯せば、聖書を背理に陥らしむべし、先づ諸子は再三反復して「永遠を説ざる可らず、吾人は、永遠の何物たるを理會し得べし、然れども、永遠とは何ぞや、諸子は一箇以上の永遠を有する能はず、讚詞に曰く、國と權と榮は爾の窮なく有たまふ所なり」と、聖靈に反する罪の場合に於ての翻譯は應に斯の如くなるべし、そは此永遠に於ても、又未來の永遠に於ても、彼の罪を赦さざるべしと、我主の詞は此の如し(太十三〇卅九)「收穫は永遠の末なり」と、即ち無限の末とは我主をして妄誕を語らしむるものなり、又可四〇十九に於ての翻譯は、此世の思慮に、あらずして、此永遠の思慮道を蔽ふと言ふならん、路十六〇八に於る、此世の子輩は、此永遠の子輩となるべし、羅十二〇二は、此永遠に效ふ勿れとなるべし、哥



前十〇十一に於て、世の末に遇へる」と云ふ語は、永遠の末となるべし、次に加一〇四を擧げ、彼は今の悪世より我儕を救出さん」と云ふに、今の悪き永遠より」と爲るべし、提後四〇十に於る翻譯は「デマス此永遠を愛して我を棄てたり」となるべし、又、今世の末に彼は一たび顯はれたり」とは俗説に據れば「永遠の末に於て」と解せざる可らず、乞ふ明に其意義の歸着する所を述べん、*aion*の其必要として無限永續の意義を有するか、又は少くも其通常の意義を有するか、又は然らざるか、若し然りとせば一時に左の困難起るべし、(一)若し *aion* が無限の時期の意を含むとせば、何故に複数を有し得るか、(二)若し *aion* 自から無限なりとせば *aion* を *aion* に附加する場合に於て聖書に再三現はるゝ如き文句を用ふるは如何、(三) *aion* 又は *aions* 及 *Beyond* に對する如き文句の來るは如何——*ton aionai kai ep aionai kai eti : eis tous aionas kai eti.* (七十子譯出十五〇十八、但十二一〇三、米

四〇五を看よ) (四)吾人の屢々 *aion* の末と唱ふ、其故如何(太十三〇卅九、四十四、九と廿四〇三と廿八〇二十、哥前十〇十一、來九〇廿六) (五)終に問はん若し *aion* を無限とせば何故に嚴に有限なる者に再三適用するか (例へば可四〇十九、徒三〇廿一、羅十二〇二、哥前一〇廿、二〇六、三〇十八、十〇十一等) 然れども *aion* を無限なりとせずんば如何なる道理を以て *aionios* なる形容詞其意義 *aion* に屬すを譯するに「永遠」*eternal* なる語(無限 *endless* の同義の語として用ふるべき) 及無窮 *everlasting* なる語を以てするか。

實に我翻譯者の唯英文の聖書のみを読み得る者に對し甚だしき損害を與へたり、彼等は甚だ重要なる教理則ち、時代エーポックの教理を全く掩蔽したり、若し此教理を充分に理會せば救濟の企と神工の法とは一道の光輝を放つべし、今 *aion* 及 *aionios* なる語を真正の翻譯に挽回せば當に勢力と



光輝とを發揮すべき少許の例を擧ぐ、太廿四〇三を看よ、我翻譯は弟子が「世の末の兆は如何なるぞや」と問ふと言へり、こは「時代」の末と謂ひざる可らず、猶太の時代の末はジェルサレムの没落を以て區分せらるゝなり、太十三〇卅九、四十、四十九に於る眞正の翻譯は「世」worldの末よあらず、「時代」ageの末なり、是れ重要な變更なりとす、約十七〇三の「永遠」の生命は「時代」の生命と爲さざる可らず、即ち救の企の成遂げらるゝ時代に特有なるものなり、又來五〇九、九〇十二、八〇廿を看よ、「永遠」の救は Baonian、即ち時代の救と謂はざる可らず、「永遠」の贖は「時代」の贖なり、永遠の契約は「時代」の契約、即ち贖の時代に固有なる契約なり、弗三〇十一の「永遠」の趣旨は實に「時代」の趣旨、即ち「時代」に於て成し遂げらるゝ趣旨なり、同三〇廿一に於ては我翻譯に依り全く其意を掩蔽せられたる請願の文句あり、此語が疑問に在る場合に於て通例なる如く原文に「總

ての代々の子孫まで」と言へるを單に「世々」と譯して精微の所説を掩蔽するは全く不正なり、哥前十〇十一の「世の末」は「時代の末」なり、同二〇六、七、八に於て aion なる語は四回「世」world と譯せられたり、是れ孰れも時代又は數時代 age or ages と爲さざる可らず、此等の場合に於て暫く aion が world の意を有すると假定するも如何なれど everlasting (永遠の) の如き語を形容詞として用ひ得るか、と云ふ疑問の起るは免る可らざる事なり、若し aion が world の意を有するとせば、其形容詞は worldly (世の) of the world (世の) と爲さざる可らず、而して常に一の譯語 age (時代) を守れば我翻譯に於て大なる勢力と活氣とを加ふべきなり。

又來十一〇三の「諸の世界は造らるゝは」諸の時代と謂はざる可らず、同九〇廿六の「今世の末に一たびは」諸時代の末に」と謂はざる可らず、又猶太書の末文を看よ、之を直譯すれば、凡ての時代の前より、今、また凡ての時



代まで獨一の神に榮われ云々即ち諸時代の始の前より、今また未來の諸時代までと云ふ義なり、故に黙一〇六の「榮光は原文に於て、幾時代の時代まで」基督に屬せしめらる。提前一〇十七の「永遠の王は諸時代の王にして、同六〇十七の「この世の富る者に命せよ」は「此時代の」と謂はざる可からず、彼後二〇十七の「暗霧永く存せり」は「此時代の間」と謂はざる可らず、即ち不定なれども有限なる時期を指すなり。彼後の終り(三〇十八)に在る著しき一句は我翻譯お於て掩蔽せられたり、即ち原文又は「此時代の日まで」と云へるを譯して「今も永遠も彼に榮光あれ」と爲せり。此引證を説明せる第八節を看よ、余は尙ほ續々例證を擧るは容易なれども既に述べし所に由り聖書が「時代の教理」を吾人に教へんと欲することを示すに足れり、此等の反復せる用例に於て、此等特別の語を使用せる一定の目的なかる可らず、吾人は *case* の場合に於て我翻譯を損害し不

正と爲す所の誤謬矛盾を痛嘆せずんばならず、されば如何なる理に據り我訂正者は *view* なる一語を譯するに *world* (世界) *course* (時勢) *age* (時代) *eternal* (永遠) *for ever* (永久) の五種の文字を用ひしや(例へば弗一〇廿二、二〇二、七、三〇十一、廿二)之を問ふは頗る有益の事なり、我教師及翻譯者が正鵠を失へるとそれ斯の如し、

乞ふ簡短に「時代の教理を述べん」余思ふに *conious* なる形容詞は「生命」刑罰「契約」時期若くは神自身を用ひられしにせよ、神が或恐るべき墮落に遇ひ之を匡正する爲めに働く所の時代又は時期の概念と治療の働くに常に關係するを見るべし——(ジュークス氏)「諸時代」に於て救拯作用の行はるゝ憑據と一定の心靈力とは實に此語に於て現はさるゝなり、又更に之を主張するの必要あり、蓋し吾人は羅馬加特力の煉獄説に反動を起せしより極端に走り、凡て神の吾人に及ぼす關係は現世の狭き瞬



間に限るべしと思惟するに至れり、然れどもこは一層真正高尚なる福音の教義に對して吾人の目を閉つるものなり、神が其救拯の企を新約全書に於て説くに當り此等の「時代」を再三引證せしは抑も如何なる神意ぞ、俗説に據れば此文は如何なる意味もなしといへども、そは果して正當なりや、合理なりや、若し此等の語の明に教ふる所を承認せば吾人は神が終に万人を救ふ爲めに顯はせる目的と其威嚇とを調和するを得べし、實に救拯の真正の範圍は數時期又は數時代に擴かる一大計畫にして吾人の現生は只其時代の一たるに過ぎず甚だ短かき部分たり、と云ふ事は此等の(ages)諸時代に於て指示せらるべし、又基督の働の依然として繼續する事も此諸時代に依り明に教へらるべし、蓋し「基督は今日も昨日も幾時代までも變らざるなり」(來十三〇八)而して彼は「幾時代までも生き、死と陰府との輪を持つ」とを吾人に確證せり、是れ此關係に

於て有味の語なり、されば吾人は之を經典に教へられたる「幾時代の趣旨」(弗三〇十一)なりと信ず、加之吾人は左の榮光ある語に因り此界を越て瞬間の一瞥を經典と許されたり、即ち此等の時代は現はるゝ末に於て、凡ての敵の滅され凡ての失へる者の見出さゝるとき、基督は國を神と渡さん而して神は万物の上に主たらんと——(哥前十五〇廿八)

「彼は燐を燃さる火にて燬べし」——(太三〇十二、路三〇十七)

(甲)如何なる良字書に據るも、不熄てふ譯語は實に其觀念を傳ふるの乏しさを示すべし、ホーマー氏は屢々之を「榮光」「大笑」「叫聲」と希臘の艦隊を燒盡したる暫時の火とに用ひたり、ユウセピアス氏は殉死者が「不熄の火にて燒かれし」と言ふと二度に及べり(教會史六章四十一節)サイリル氏は燃たる供物を燒盡す所の火を不熄と稱せり——*De ador. lib. x.* 誤譯の爲め慈愛の心に苦痛を惹起すとい之を思ふも恐るべし、恐らく十



中の八九は、決して熄ざるべしてふ不面目なる翻譯を爲せり——可九〇四十三及五乙又若し前後の文勢を檢すればそは現在切迫の審判を指し未來の刑罰を指すものにあらざるを知るべし、丙全体の文意は來世に於る惡人の無限の酷刑を含むにあらす、基督の烈しき洗禮に依り凡ての穀粒の周圍に在る糠の滅ぶるを云ふ、蓋し如何なる形容を用ふるども燃ゆる糠を以てするよりも一層完全に消滅の意を言顯はすと能はざるべし。

茲に余は我讀者に向ひ口碑的偏見を捨て明白なる事實を沈思熟考せんとを切望すべし、聖書の慣例は據るに“unquenchable”（不熄の如き文字を狭隘なる文字通りの意義は全く妄誕たることを確示せり、今二三の類例を擧ぐ、永く燃る火をイスラエル人に向て發せしが——耶十七〇四、イスラエルの人々悉く救はるを得ん——羅十一〇廿六、イスラ

エルの全家——結卅九〇廿五も亦然り、又曰くイスラエルの創は、愈す（incurable）其痛は愈す——耶卅〇十二及十五と然れども直に附加して曰く「余汝の傷愈ざるを醫さん」と——同十七何西阿も亦神がイスラエル人を棄て最早之を憐まざることを再三述べしが、同一の語氣を以て其終に赦されて調和せらるゝと言へり、——何一〇六、九、十、二〇四、十、四、十五、十九、廿三、九〇十五、拾三〇十四、拾四〇四此語句は宜しく吾人の沈思熟考すべきものなり、亞麼士に於ても同じく著しき教訓あり、イスラエルは復起わがらず（五〇二）と言ひるゝも亦神は之を興すべしと言へり、——（九〇十一）凡て公平なる讀者は斯の極意を視察し、又斯く明示せる解釋法の實に甚だ遠きに達するを知るべし、又吾人の視察せし如く凡てのイスラエル人の復興の特約は之に與へられて且新約書に再三説かると（羅十一〇廿六）と雖も、熄ざる火は彼等を燬べし——（耶七〇



廿「無窮」の譴責と永久の耻辱は彼等の上に来るべし——(耶廿三〇四十)「永久」人の笑と爲り(耶十八〇十六)永く荒地と爲り(耶廿五〇九)永く背反す(耶八〇五)と云へり、然るに以上の如き語句の意味を全く誤解して之を楯とし(甚大に)無慮幾百万の神の子に無限刑罰の宣告を爲さ者あれば、之に對し或正義の憤怒を發するは必然の事なり、乞ふ更に検査せん、獨りイスラエル人の罪のみ、愈し難きにあらず、サマリア人の傷も亦然り、——(米一〇九)然るも此、愈す可らざる傷は愈ざるべし、是れサマリアの俘虜再び還さるればなり、——(結十六〇五十三)只是のみならずソドム及ゴモラは、永遠の火の罰を受け(猶)永久に荒果つべし、(番二〇九)然れども「永久」の荒廢は復興に於て終るべし、結十六〇五十三聖書に於る「永久」の意は常よ此暫時の意なり、例へば利三〇十七、貳拾四〇九、貳拾五〇卅四、耶參拾參〇四十アモンも亦「永久」に荒はつべく(番二〇九)倒れて復

た起ざるべし(耶貳拾五〇廿七)と雖も、末の日に至りて還さるべし(耶四拾九〇廿九)埃及に就ても亦同じ(耶貳拾五〇十九、廿七)を結貳拾九〇十三等と對照せよ、モアブは滅さるゝも又返さるべし(耶四拾八〇四、四十七)

何故に總て斯の如き歎、何故に預言者に於ては最も畏るべき威嚇と最も光を發する希望と互に相衝突する歎、何故よ慈悲と恐怖と失望と歡喜と同一人に具備して相交替する歎、何故に斯く混沌たる如く見ゆる歎、是れ神が衝突の目的を有する爲めにあらず正に衝突の目的を有せざる爲めなり、即ち威嚇と希望とは其よ同一の目的に供せらるゝを以て相混淆せるなり、加之聖書の威嚇は如何なる記録よりも一層畏るべきものなりとするも、そは屢々文飾にして虚相なるや明なり、又吾人は普及救済の直接なる契約の過半(若くは全体)を失ふとも、神は愛なり」と



云ふを知り、神に依り、万事を爲し得べし」と云ふを知るを以て、吾人は尙は希望を有するを得べし。

「汝おれ狂妄おごりよきいふ者は地獄の火に干ちがるべし」——(太五〇廿二)

普通の解釋は以上の語をして背理に陥らしむ、人を狂妄と呼ぶは愚者と呼ぶよりも一層悪しき罪なり、是に依り人は一方の罪の爲めに審判に呼出され、他方の罪の爲めには無限の刑罰に落さるべしと云ふは信し難し——*Salv. Mund.* 此句の地獄の火はゲヘンナ *Gehenna* の火なり。

「魂と身を地獄に滅し得る者を懼れよ」——(太十〇廿八)

此等の語は神の志向より寧ろ其勢力を指示するものにして、即ち神の魂と身を滅し得べしと云ひ、神は斯く爲すべしと云ふにあらず、若し志向を指すとせば、「死」と「滅亡」(第六章)とに就き以上に言ひし所を讀む者は、滅亡と死とを以て生命を得るの路となす事の實に聖書の用例と一致

せる所以を容易に悟るべし(十六、十七、三百十二、三百七十六、三百九十四頁を看よ)

「若し人全世界を得るときも其魂(生命)を失はば、何の益あらんや」——(太十六〇廿六)

是れ人罪を免れずんば其魂を失ふべし、其損失たる全世界を失ふよりも大なりと云ふとを實に示すものなり、然れども(第一)此損失は何を以て無限の刑罰又は無限の罪を教ふる(一時神の面前より退けらるゝは生存する間全世界の快樂を享るよりも遙く重大ならん)又(第二)何を以てとは最後の復興に反し基督の失へる魂を尋ね求むる事に反すべしと證明するか。

「地獄の刑罰」——(太貳拾叁〇廿三)

こは註釋を施すに及ばず、然れども真正の翻譯に訂正せば、ゲヘンナ *Gehenna* の審判となすへし。



「全身を地獄に投入らるゝ云々」——(太五〇廿九及卅、十八〇八及九)

此文章は可九〇四十三及五十と同一にして合はせて之を考究すべく又之と比較すべし、故に彼處に於て充分の翻譯を爲すべし、本文の「地獄」は *Gehenna* なり、第十八章八九節の「地獄の火」は *Gehenna* の火なり、無限の火は *aeonian* の火なり。

「此等の者は窮なき刑罰より、たゞしみの窮なき生命に入るべし」——(太廿五〇四十六)

此本文の若し正しく翻譯せば普通の神學と全く異なり且之に反する解釋を要すべきが如し(甲)窮なきエヴァーラスチングと「窮なき」といひ *eternis* を表して時代の又は時代に屬する即ち *aeonian* の義なり(乙)若し全く無限の刑罰の意なりとせば、通例無限の意を有せずして反對の意を有する語を用ふるは不審なるが如し(丙)刑罰と譯せる語は *punishing* 即ち矯正すべき刑罰にし

て正に斯く翻譯せざる可からず(丁)故に威嚇せらるゝ者は吾人普通の地獄の反對にして時代又は數時代に適する矯正法なり(戊)此慈悲なる目的中左方の者に適用せる語に於て屢々注意せられざる暗告あり、それは元來 *kids* 又は *kidlings* (山羊仔)即ち一定の感情を含む所の一約語なり、故に山羊仔は除酵節の供物に羊仔と等しく用ひられたり(出十一〇五)又カタコーム (*Catacombs*) に善牧者が山羊仔を其肩にし家に持來ると往々記載せり、是れ羊仔にあらず即ち山羊にして羊にあらず(己)吾人は黙廿〇十一に於て審判の寶座は白く(親愛平和の表徴)と言へるを忘る可らず、然れども或人云ふ之と同じき語は救はれし者の幸福と失はれし者の刑罰とに適用せらる、若し後者の場合に於て無限の意を有せざらんば救はれし者の幸福の不確實たるを免れずと、余對て曰ふ(第一)若し然りとすも吾人は隨意に誤譯を可らず、然れども(第二)實はその然ら



ざるや確實なり、其實本文は一時代の *sonian* 刑罰と一時代の *sonian* 賞恩とを示せども、孰れも精密なる期限の全問題は全く之を言はず、蓋し *sonian* なる語は全く不定にして時の限界の問題に關係せず、只賞罰共に未來の一時代又は數時代に持續することを教ふ、此時代又は數時代の後に起るべき疑問は此章に於て發表せられざるなり。

茲に注意すべきものあり、救はれし者の幸福の無限なるは、吾人が *sonian* に指定する意義に在らず、無限の生命なる神と一致するより起る結果として自己の眞實に由るものなり。此外の經文に於ても容易に之を發見すべし、例へば「神の旨を行ふ者は永遠存するなり」——(約壹二〇十七)「われ生れば爾曹も生る」——(約十四〇十九)「人もし我道を守らば窮なく死を見ざるべし」——(約八〇五十一)(五〇卅五參照)(詩百二〇廿八比較)

(庚)余は此等の註解に於て共に甚だ疑はしく且共に口碑的信條も好都合なる二箇の假説を爲せり(第一)余は *sonian* の現時も於る關係を假定したれどもそは證據とするに足らず、蓋し新約全書に於て往々心靈的倫理的の意義を疑なく有すれば此處に於ても亦然るや全く明なり、然らば其意たる正者と不正者は各々賞と罰との *sonian* 即ち心靈的狀態も至ると云ふに在り(第二)余は此句が第一に最後の審判に關することを假定したれどもそは最も不確實なり、蓋し此等の語は廿四、五章(吾人の區分曖昧なり)に擴張する所の連續せる議論を收結する者也、而して第廿四章に於る弟子の疑問は「世界」*world* の末に就て謂ふにあらず「時代の末なり、されば吾人若し自から口碑的感得を脱して聖書其物を指導者となさば、遠隔の未來に論及するは不正なり、基督自から明言する所の審判(廿四〇卅四)又其説く所の万物は其時代の經過する前に完成せらるべし、而してそはシエルサレムの滅亡と(猶太)時代の末とに因て起



る所の恐るべき不幸(此等の事件は東方の比喻にて記さるべし)の全く自然に完結するを知るべし、又實に我主の語、凡ての國民(五〇卅二)は國民の審判に關係し、審判を國民に及ぼすべき原則を艶曲に指示するが如し、實に益々考察すれば此引證をして益々確實ならしむべし。

「地獄即ち滅ほろざる火に往まく云々彼等の蟲むしつきす火ひきえず蓋すべての人は鹽しほをつくる如く火を以てせらるべし」(可九〇四十三及五十)

(二)先づ訂正せる經文が此處に言へる威嚇に大に重さを加へしむる所の第四十四節及第四十六節を除きしとを注意せよ(三)此全文(蓋すべての人は鹽を漬る如く火を以てせらるべし)は四十九節の所説に附屬す、是れ通常不問に附せられたる事實なり、此等の語は前節の理由を指示する者にして、此文の眞意が凡ての人の受くべき或犠牲的又は清洗的作用に在ることを示すが如し、是れ哥前三〇十三に於て、其火各人の工の如

何を試むべしとあるが如し、若し隨意に犠牲を爲さず又眼或は足を犠牲にせざれば一層鋭き犠牲、一層厳しき刑罰を要求せらるべし、(三)地獄と譯せる語は Gehenna なり(四)滅ざる火と云ふ句は舊約全書より引用せしものにして此句又は之と等しき句は七十子譯に顯はるゝと十二回なり、即ち利六〇十三、王下廿二〇十七、代下卅四〇廿五、賽一〇卅一、卅四〇十、耶七〇廿、十七〇廿七、結廿〇四十七及四十八、歴五〇六、耶廿一〇十二、然れども凡て此等の文句に於る火焰は暫時なり、賽六十六〇廿四は特に此處に引用せる經文にして其自然最初の意は Gehenna に投込まれたる罪人の死体を食ふ蟲と火とに關せり、東洋の比喻にて此等の蟲と火は死せず滅せずと言へり、蓋し火は汚穢を除く爲め常に燃され、蟲は屍と腐肉を常に食ひつゝあればなり、(五)火と蟲は共に其性質に於て清洗するものなり、(六)決して滅ざる火と云ふ維持すべからざる翻譯



は訂正譯書に見ざる所なり、原語は太三〇十二と其註とに在るものと  
同じく屢々火に(又種々の物に)適用せられ(最も短き期限のものにも)た  
るを證せべし。

「聖靈を瀆す者は限なく赦さる可らず限なき刑罰に干らん」——(可三〇廿九、太  
十二〇廿二)

諸教父の時代も尙ほ活用したる言語より引用せる章句の解釋を含む  
問題に於ては、此罪も對する諸教父の意見を知るを最も必要なりとす。  
ピンハム曰く古人の最も多く聖靈に背く罪に就て抱きし概念は全く  
赦せ可らずと謂ふもあらず、只人は真に之を悔改せずんば此世に於て  
も次の世に於てもその爲めに罰せらるべしと謂ふも在りと——(第二  
卷九百廿一頁)アサナシスは此罪に就て左の如く言へり「彼等は赦さる  
べし、蓋し真に悔改する者には神より赦されざるの罪なし」——*De comm.*

*essent.* クリソストム曰く吾人は知る此罪は之を悔ひし者に赦された  
りと、然らば其意義は如何なる凡ての他者よりも赦され難き罪なり——  
—*Hom. xlii. in S. Mat. xii.* アンチオクのヅキクトルも亦斯く言へり——  
*Comm. in S. Marc. iii., S. AMBROSE—De genit. ii. 4, &c.* 降て第十世紀に至り  
イオニシアス(サイラス)も亦言へり、聖靈を瀆せし數多の者はその後悔  
改して赦しを得たりと——(シリアの原書より譯出す)——(*Dub. 1762.*)  
茲に記するに足るべき二點あり(第一)此等諸教父は如何なる罪も赦さ  
れ難しと云ふとを信せざりしと(第二)彼等は *eis ton aiona or aionios.* なる  
句を吾人の譯書に於る如く「絶無」又は「無窮」なる嚴刻の意味を有すと  
信せざりしと是なり、されば何人も之に等しき「エリーの家の悪は永く  
清められず」(母上三〇十四)てふ句に強ひて文字通りに赦されざる意味  
を附するとなかるべし。



余は左の事を附記せん、若し吾人馬可傳に於て教權ある經文を守らば「墮落」と譯せる語は單に「審判」たるのみ、然れども其眞意は恐らく *humane* (罪) 即ち罪過にして其結果未來の世又ハ幾世にも續くべし、「絶無」と譯せる句は聖書中處々に於て「and beyond」即ち「and after」(例へば出十五〇十八、但十二〇三)なる語を從へたれば文字上此意に異なれり、馬可傳に於て之と同じき句を別語を以て現はせり、そは此世(即ち時代)に於ても未來に於ても教はれざるべし、此等の語は數多の場合に於て此生活の後に罪の赦ある意を含む、——(口碑的) 信條の粗漏なる事實) 故に死後の悔改ハ全く爲し得べき事なり、次に此時代の後、未來の時代とに拘はらず聖靈を覆す罪さへ赦されずとの断定なし。尙ほ數言を附加せん、此恐るべき罪はスクライア人及パリサイ人即ち頑固狹隘の熱信家の罪にして不信心の罪にあらず、彼等言へり彼は不潔の精靈を有せし故に罪其物ハ甚だ明に定めらる(五章卅節) 其本質ハ善靈と惡靈との働きを混淆するに在り、例へば卅七及八頁に於て何等の惡しき行爲をも神に歸するが如し、無限刑罰の如く吾人の良心ハ惡なり殘忍なりと吾人に

に語る所の行爲を神に歸するは此恐しき罪に接近すべからざるの謂也。

「若し彼生れざりしならばその人(ユダ)の爲めに幸なりしならん」——可十四

廿一、太廿六〇廿四)

熟視せよ、我訂正者の原文が別異の翻譯を要せるとを承認せり、即ち若し彼の人生れざりしならば彼の爲めハ幸なりしならん、是れ明に全く意義を變更せり、そは若しユダあらずれば彼の爲めハ欺かれたる主人の爲めに幸なりしならん、と云ふの意なるや明瞭なり、通例の翻譯は實に希臘語の成文法の通則に背けり、吾人の反對者は此事を記憶せざる可らず、又極端の意義を取るとするもユダの宣告の言辭ハ全く其無限の苦難に罰せらるゝを證せざることを記憶せざる可らず、蓋しユダ若し最終日に於て滅されしならば、彼等極めて満足されしならん、加之ユダ若し叛逆の際に死して最早決して一の苦痛も受るとなくんば、彼



等は極めて事實を合ふたるからん。

然れども通常の翻譯を取ることも文字通りに此語を解するは極めて困難なり、蓋しユダは或種の後悔を爲したり(太廿七〇三)眞實なる悔改を現はせる證據四あり(一)彼が犯罪の贖銀を投棄せしと(二)己れの罪あるを公然告白せしと(三)己れが証きたる人の無事なるを公然證明せしと(四)斯る罪に相當する價は死なりと深く悟りたる是なり」—Cox, *Expos.* i. p. 356. ユダは十二弟子の一人としてイスラエルの十二種族を審判に附するの特約を有したり、然れども汝は言はん是れ約束なりと余も亦答へて曰はく然りし而して威嚇は期約の如く定められたるものにあらず、若し然らずんば孰か何故に其然らざるを證明すべき歟、富は明に天國より拒絶せらる、吾人の反對者は之を文字通りに解すべき歟。

「ダイグスの比喩」——(路十六〇廿六)

(一)ダイグスはユダの如くアブラハムの子にして、アブラハムの「イスラ

エル人は悉く救はるべし」と彼に語れり(一)ダイグスは地獄に在りしに非ず、墳墓の中(訂正譯書を看よ)即ち其兄弟生存せるを以て審判日に先だつ中間の状態に在りしなり(三)ダイグスの其譴責を受けし爲め明に改心せり、即ち他人を思ふに至れり、神は其嚴律に由り未來の望なき苦痛の状態に於て單に之を撲滅すべき斯の匡正を生し得るか、是れ果して信すべきか(四)彼の淵は永く渉る可らざらんと云ふとなし、茲に言ふ所は斯くあり(其時斯くありし)と云ふとなり、此場合の恰も人が一定時間獄舎に入れられて其朋友が彼と汝の間に通過す可らざる障壁を設けたりと嚴く語らるゝが如し、是れ極めて眞實ならんと雖も刑罰の指定時期を過ぐれば其障壁除去せらるへきなり(五)而して如何なる場合に於ても基督即ち死と陰府との鑰を有する者が此淵を渉り得ざるは如何ぞや(六)余が今言ひし所を疑はんとする者は聖アムプローズの言



を引證すべし、彼は詩百十九を註解して斯く言へり、然る故に福音書の  
 ダイヴスは罪人なれども速に免るべき刑罰を課せられたりと、斯く明  
 にダイヴスの最後の救を信することを斷言せり、又聖ゼロームは基督が  
 實に此位地に在りし所の者を免るせしことを明に二回以上斷言し、(亞九  
 ○十一と賽十四○七に於て)斯く巨大なる淵の涉り得べきことを信すと  
 斷言せり、(七)此比喻を以て文字通り陰府及天國の記載なりと爲す者は  
 其知らざる重大の困難あることを記憶せざる可らず、幸者は不幸者の苦  
 痛を傍觀すと、然らば恐るべき陰府と其不幸にして苦しむ者とは實に  
 幸者の目前に永く現はるべきや、——(歌十四○十及十二)彼等の歡喜を  
 増すべきか)

「子を信ぜざる者は生命を見るときを得じ」——(約三○卅六)

此意の明なり、即ち不信者は斯く依然たれば生命を見るときを得ずと雖も

若し悔改せば平和を得べし、然らずんば全く失はるべし。

「墮落の復活」——(約五○廿九)

此處には只訂正譯を示せば足れり、即ち審判の復活にして刑罰にあら  
 ず、審判の比喻に就き一言を述べん、此等の神聖なる談論及其比喻に恐  
 るべき教理を附加するは全く不正なり、就中最も嚴刻なる者を擧げに  
 太十三に於ても、世界の終りを疑ふべきものなし、その全く誤譯として  
 單に「時代」とすべきものなり、又所謂「火」が永く續くべしと示すものなし、  
 彼等が警戒を與ふるとを充分に認め、又基督の教義を嚴刻に解説する  
 ども、尙ほ斷定せる事實を或遠遠なる未來に延長せば、審判の寶座の今  
 尙ほ在ると、吾人今其前に立てると、基督の「不滅」の火今尙燃へつゝある  
 と、幸なる哉、都て原文に於て此語の用例の表す如く、全く其業を爲せし  
 まで、不滅なるとを忘れて其眞意を掩蔽すべし。



此處に於て余は前版に脱漏したる或章句に數言を附加せん。エサフは「悔改せんとを得ざりき」と言へるとあり、——(來十二〇十七)然れどもエサフは家督の權を失ひ復た挽回するを得ざれども幸を享けたり、信仰に由てイサクはヤコブとエサフを祀せり——(來十一〇廿)聖ポールは罪人を待つに *bonum* 亡滅を説き(撒後一〇九)又其終りを滅亡なりと説けり(腓三〇十九)余は讀者に向ひ既に *bonum* なる語と「滅亡」及「死」の如き語の聖書上の用例とに於て十分述べし所(三百八十三及九十二頁五百廿一及三十二頁)を對照せんことを乞はざる可らず。

或は「看よ、今は救の日なり」(哥後六〇三)と云ふ語より救は此生活のみに限れりと論する者あり、余は古代教父の言を以て答へん、神と共に在れば常に「今なり」と、一層合理的なる口碑的信條の主張者は凡ての場合に於て救を此現世に限らんとするや否と問はん、然れども原文と對照せ

ば此處にも亦誤譯と誤解とを現せり、聖ポールは基督を説く所の(賽四十九〇八)を引用して曰く「救の或日(一定の日に非ず)に於て余は爾を助けたり」と、助けられ即ち救の業を強くなさるゝ者は基督なり(罪人に非ず)實に聖ポールは無益に福音を受け取らざる爲め哥林多人を戒しめ、又此神約に於て救ふ爲め基督に與へられたる慈悲を彼等に想起せしむる所の句を引用して其説を維持したるなり、彼の斯く大なる慈悲に伴はれたる進物を投棄す可らずと勸めしなり、時期の限界を定めて此期を越れば基督は今福音を棄る者を終に救ふを得ずと云ふ事は、此處に於てポールの心にも又以賽亞の心にもあらざるなり、次に余は來六〇四及六を擧ぐ(一)古代の人は大抵洗禮を以て之を解明せり、即ち彼等の見解を據れば、記者は單に洗禮の反復を禁せりと(二)今日の教師中此經句を以て此生活に於て如何なる罪人も悔改の力を拒むものなり



と爲す者は、若し存するにせよ、實に殆んど稀ならん。然れども若し然りとせば、此經文の關涉する所に據り、悔改の力が此世の後に拒まるゝは、何故ぞや(三)此に言ふ成し難きは道理に合ふ神 *qua God.* に非ず、即ち此等の語たる神の恩を妨げざるなり(四)故に基督は之を救ひ難しと宣告せし如き者を救ふ、例へば富人ザアカイの如き是なり、來十〇廿六及卅一は上に等しき語句を吾人に現はせり、即ち其語に據れば恐るべき審判は頑固なる罪の爲め、設けられたると最早之よりも利益多き犠牲なきとを斷定せり、數多の教父等は此句を以て單に第二洗禮の成し難きとを教ふるものと解せり、其真意は恐るべき審判の一定の目途の唯頑固にして増長する罪を保續する者の爲めに存するのみと云ふが如し、即ち彼等は火を以て清むるを要す、——(六章火及審判に於て)記者は神の審判を寧ろ有望の側面より視察せる申卅二を此處に引用せ

り、殺すこと活すこと撃つと愈すとは凡て我これを爲す——(卅九)余は全く此火に依る清淨と審判とは或人に奇異の思をなましむるを知れり、何故ぞや、蓋し狹隘なる傳説は聖書の最要なる教理を其信條より拒絶すればなり、我主の詞、鹽もし其味を失はし何をもて之に味を和んや(路十四〇卅四)(太五〇十三)に於ては一層強く言へり、可九〇五十參照に余は數言を附加せん、假令へ人の力にて鹽の全く失はるゝにせよ、駱駝をして針孔を通過せしむる神の、必ず鹽の味を回復し得べしと云ふを以て足れりとす(科學上より言へば鹽は決して其味を失はずと信す)吾人は今や新約全書の重要なる句節にして世俗的信條を教ふると想像せるものは黙示録中の文句を除く外悉く之を考究せり、是より吾人をして黙示録に眼を轉せしめよ、余は先づ神秘の示理と高調の比喻に満ちたる書を想像して、陰府の定説を立るの不正なるを反駁せん、其示現



は散文を以てせずして詩を以て説けり、東邦人種の詩は西邦の詩よりも遙に想像的にして高尚に作りたり、此等の比喻を恰も神學の言辭を説くが如く判断するの之を不正と謂はんよりも尙ほ悪しく、寧ろ虚妄と謂つべし、然らば無限の害悪と苦痛とを維持せん爲めに屢々引用せらるゝ句節例へは十四〇九及十一を擧ぐ、そは初めに恐るべく見ゆるも虐王子の時代と實に關係せりと余は信するなり、拷問せらるべき虐王の崇拜者は則ち其従者なり、而して拷掠に於る引照は現に該時代に羅馬に起りたる恐るべき現世の災害を謂ふものなり、何派の思想を有する人にてても若し虐王の崇拜者の眞意が羔と聖天使の前にて、晝夜絶えず拷掠せらるゝに在ることを理會せば轉倒せる重力を感せざる者あらんや、是れ羅馬に起りたる恐るべき現世の苦痛に於て十分に見るを得へし、此際羔と聖天使とは人間の言語を以てすれば此罰の原告とし

て現れたり、エリオット氏も其默示録に於て此句を單に一時の審判と解きたり、余は吾人の反對者が不幸者の苦難の烟が羔と聖天使の前にて永く立登る事を實に信するや否を明に告白せんことを望む、余は彼等は斯くあらんと信すと雖も、若し然らずとせば其他に於て同様の詞及同様の形容を彼等自身の原則を以て文字通りに解せんことを吾人に求むるは何故ぞや、乞ふ明白に之を説明せよ、然れども要するに子口が虐王たるにせよ、將た然らざるにせよ、之と等しき激語が其他に於て單に瞬間暫時の審判に用ひらるゝや確實なり、其證として賽卅四〇九及十を檢しエドムの地の暫時の災を記する所の深く激せる語を讀め、即ちエドムのもろくの河はかはりて樹脂となり、その塵はかはりて硫磺となり、その土はかはりてもゆる樹脂となり、晝も夜もさえず、その烟つくる期なく立騰らん、今吾人此等の比喻は斯く恐らしく聞ゆるも只瞬